

鶺鴒沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 2 2 号

〈歴史散歩〉 史跡めぐり — 龍口寺	1
〈事業報告〉 「楷の木を語る」 — 鶺鴒沼地区公民館まつり	8
江の島ヨットクラブの発祥	熊川 博 10
“消え去った鶺鴒沼弁” 標準語との対比	並木 宏之 18
〈チョッと見てみよう〉	
むかし「東屋」周辺の道路幅はすべて一間だった	有田 裕一 24
Coffee Break	28
鶺鴒沼の赤蛙は美味しい	岡田 哲明 30
お菊むし ジャコウアゲハ	竹内 広弥 34
国分別邸	岡田 哲明 36
『鶺鴒沼雑記』(六)	古志 秋彦 42
〈鶺鴒沼を巡る千一話より〉	
山の音と鎌倉文士	渡部 瞭 47
活動の記録(令和3年12月～令和4年11月)	52
編集後記	56

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鶺鴒沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる

鶺鴒沼を語る会 発行

史跡めぐり—龍口寺

2022 年 3 月 8 日

昨年 11 月の例会に予定していたが悪天候のため中止となった「史跡めぐり—龍口寺」 今回は 3 月例会日(2022 年 3 月 8 日) を充て、15 名の参加者を得て行われた。当日朝は 8 時ごろまで雨がばらついていたが青空も見える天気。天気図や雨雲の動きを確認、雨はやみ薄日ぐらいいは差しそうなので予定通り遂行した。

今回の史跡めぐりは企画からガイド役まで小池清志会員が引き受けてくれた。午前 10 時、江ノ電・江ノ島駅に集合。気温は低いが雨の心配はない。

まず龍ノ口刑場跡へ。小池ガイドの説明に耳を傾ける。仁王門をくぐり最初の階段をのぼり山門へ。左右の羽目板に中国の故事が施されている。正面には大本堂が、その右奥には五重塔。

二つ目の階段の左手に御霊窟がある。龍ノ口法難の際、日蓮聖人が一時幽閉されたという土牢で、聖人の銅像が安置されている。中を覗くが暗くてよくわからない。この階段で集合写真を撮り、いよいよ大本堂へ。三つ目の階段を上がると大本堂の入口。本堂内を見学後、五重塔へ。神奈川県唯一の五重塔で初層から四層まで「宗祖一代記」の装飾彫刻が施されているのは、全国で龍口寺のみで非常に珍しいとのことである。

その後、七面堂を経て仏舍利塔へ。約 2 時間半の史跡めぐりを終え解散。希望者だけで近くの常立寺を訪れ、ちょうど見ごろのしだれ梅を楽しんだ。

(文・写真：竹内広弥)



上空からの龍口寺 (Google Earth)



山門の彫刻に見入る



御霊窟を覗いてみるが



大本堂を背に全員集合



大本堂入口での説明を聴く



五重塔を見上げる

史跡めぐり「龍口寺」参加者のひとこと

◆ 一昨年企画した遊行寺はコロナ禍で中止、昨秋の龍口寺は荒天のため延期となり残念であった。その龍口寺見学が今春 15 名の参加を得て実現した。子供の頃から単に近所のお寺さんのイメージしかなく、実は何の知識もなく、小池会員の名案内で感心させられたものが多く、史跡めぐりの重要性を改めて認識した。

五重塔は勿論、大書院、六老僧、敷皮石など短い時間の内に多くの史跡を見学出来、至福の時であった。皆さんどうもお疲れ様でした。 (有田 裕一)

◆ 早春の良き日、ほぼ満員状態の電車が江ノ島駅につくと大部分の人がここで下車、ガラ空き状態になる。それなのに龍口寺を訪れる人はすくない。

今日は小池会員のガイドで久方ぶりに会の史跡めぐりとして龍口寺に参詣した。その中で、特に五重塔について強く感銘を受けたので報告します。

この五重塔は 明治維新の際に廃仏毀釈で仏寺が廃れていく中で、明治 43 年 (1910 年) の建立と聞き驚く、さらに神奈川県唯一の五重塔とのこと。初層から 4 層までの墓股に彫刻があるが、認識を新たにしたのは初層 4 面 (1 面に 3 ヶ所) 計 12 面に日蓮大聖人「宗祖一代記」の装飾彫刻が施されていることで、非常に珍しく恐らくこの五重塔だけであろう。

また、龍口寺が今日の伽藍になったのは明治以降と聴いて、不思議なほど驚いています。これらのことを語んじてガイドされた小池会員に敬服、敬意をもって感謝すると共に、龍口寺の発展を祈りつつ筆を置きます。 (西村 望)

◆ 雨天のため半年も先延ばしにした「龍口寺」史跡巡りがやっと実行され何事もなく終わったのでほっとしたのが本音です。昨年に入会し、楷の木プロジェクトにも参加、運営委員として当日の補佐をすることになっていたからです。

当日は天気にも恵まれて有意義なひとときでした。集合写真に納まった皆様方のほほえましい満足された笑顔を見るにつけこの企画を立ててくださった小池会員の鎌倉観光ガイドとして培ったわかりやすい解説及び高校の日本史教師としての経験による細やかな説明には初めて知る喜びがありました。また、事前に配布された資料も詳細を極めとても素晴らしく、通常では見過ごしてしまう山門の彫刻の説明には感動しました。改めて感謝いたします。今回だけではもったいないのでこれからも小池先生の名ガイドを聞きたいと思います。 (田中 雄一)

◆ 「龍口寺さん」には我が家を訪れる人たちを案内して時折お参りに行っていた。といっても詳しいことは知らず、山門をくぐり本堂にお参りして鐘楼から大書院の前を通って一巡という事でお参りしたつもりになっていた。

今回は仁王門、山門をくぐった折、そこに刻まれた彫刻の数々の説明を聞きながら初めてゆっくり拝見した。帰宅後、改めて説明文を読み、これまでは頭を下げて通り抜けていただけと悔やまれた。御霊窟も初めてだった。日蓮上人がこのような土牢に幽閉されたのかと思うと胸が詰まる思いがした。本堂内陣の説明を聞き、脇陣の六老僧お一人お一人の物静かなお顔を拝し心静かなひと時であった。

ちょっと登って五重塔、きちんと説明を聞くのは初めて。特に初層正面の彫刻は日蓮上人が首切りを免れた時の様子で、各面の彫刻は「宗祖一代記」を表現したもので全国でもここだけとのことだった。以前一度だけ行ったことのある仏舎利塔への少しきつい登り道を上がりきって一息。真っ白い仏舎利塔に参拝して境内に戻り、鐘楼を経て威容を誇る大書院へ、信州松代の養蚕家が建てた3層2階建ての建物を昭和7年に移築したとのこと。次に近くの常立寺へ向かった。梅の花の下、元使塚を参拝して帰途についた。近くに住みながら知らぬことの多い地を訪ねる今回の例会は貴重な一日でした。(佐藤 和子)

◆ 厳しかった冬から日々暖かさが増し、梅が満開になろうとしている絶好の見学設定日であったが、この日はことのほか寒さが厳しかった。しかし、新型コロナで延び延びになっていた龍口寺の見学であったので総勢15人、防寒対策を万全にするなど見学への意気込みが感じられた。

龍口寺は日蓮上人が処刑寸前に難を逃れた場所としてよく知られているが、事実上、実際にどうであったのかはよく知らなかった。しかし、小池会員の詳細な事前資料とそれぞれの場所での明解な解説で日蓮処刑の様子やこの寺の存在意義を深く知ることができた。また、小池会員の説明で総門や五重塔の彫り物が一級品であることを、現場で詳細に確認することができた。私は、このグループの移動をスムーズに行う役割を仰せつかったが、どなたも遅れることなく見学を終えることができた。(大川 久)

◆ 今回ガイド役を引き受けました。鎌倉の社寺ガイドのボランティアをしていますが、7年前に脚を痛めてからガイドをしていませんでしたので、若干の不安はありましたが、無事終了できましたこと、参加の皆様方のご協力の賜物と深

く感謝しております。ガイドの仕事はコース設定と見学先との交渉が済めば8割がた終了したようなものです。

コースガイドの観点からいいますと、“事故無く終わる事”が肝要ですので、ガイドは勿論、主催者側は十分な配慮が必要です。その点で、田中さん、大川さん、竹内さん、渡部さんが前後中間を固めての江ノ島駅から龍口寺までの集団移動は万全完璧でした。

参加者へのお願いは、特にお寺さんの本堂などに上げて頂く場合、博物館等公共施設参観と一緒にしないでください。お寺さんは個人宅と認識して、個人宅へお伺いする心構えで本堂に上げて頂くよう心掛けましょう。（小池 清志）

◆ 龍口寺へは絵の仲間と描きに行つて以来とスケッチブックの日付を見ると2011年秋、11年も前のことでした。

本堂脇から五重塔へのだらだら坂は未舗装で階段や手すりはなかったと思います。マイク、スピーカー持参の小池さんの解説は大変勉強になりました。

裏山の仏舎利塔へ登ると穏やかな春の海が望まれました。



龍口寺七面堂 2011/11/30 画

その後、立ち寄った常立寺もよかった。ここは紅白の梅が有名ですが、1275年、執権北条時宗によって処刑された元の国書を携えてきた使節の墓がある（モンゴル出身力士が参詣に訪れる）事でも有名です。今回は中止になった「遊行寺」を是非、再企画して頂きたいです。（岡田 哲明）

◆ 待ちに待った史跡巡り---龍口寺。小池清志会員が企画からガイドまですべてを引き受けて下さったの本番の朝を迎えた。龍口寺の事ならこの人、ずっと前から噂に聴いていた名案内人小池さんに憧れていた。

天候やコロナ禍にあい延期を余儀なくされ3度目の正直がこの日、綿密なカラー資料とパンフレット「龍口寺」を手渡され、ちむどんどん。

まず龍ノ口刑場跡で概要を詳しく説明され、掲示板、石塔、石造の記念碑などから龍口寺の始まりを改めて知ることが出来た。日蓮の弟子日法が日蓮法難の霊跡を後世に残すために日蓮の像を刻み、初めて草庵を営んだのが1332年のこと。

住職は 1886 年から置かれたという。それまでは近くの八ヶ寺が順番に龍口寺を守っていたと資料から知り、日蓮が村人から尊敬されるまでの信仰心、経緯を改めて考えさせられた。

私の関心事は、前から登ってみたいと思っていた真っ白に輝く仏舎利塔まで行き、江ノ島、相模湾を望みたいこと。しかし運悪く頸射すべり症になり無理ではないかと思っていたが、参道の赤いヤブツバキが見え隠れして招くようで、周りの方々からも励まされて願いが叶い感激の時を頂いた。

降りるときは信州松代（じつは父の出身地）から移築された三層二階建ての大書院を拝観、美しい建物に出会えて感動でした。小池さんは素晴らしいファイルを片手に頭脳明晰、理路整然、マイクを使つての豊かで温かい口調は心に浸みわたりました。

蛇足：後日談「小池さんの忘れ物」

その晩 7 時過ぎに史跡巡りの感激と感謝を一言と小池さんに電話した。素晴しくよい企画、よいガイド、ご準備の事など「あのファイルはすごい宝物ですね」と話したら、小池さん「それが無いんだよ、どこかに置いて来たらしくリュックに入っていない！暗くなってしまったので探しにも行けないし…」「え！見つけてあげたい！」と私。そこでお節介が語る会 T さんに探索依頼 TEL。なんと翌日午前 7 時にあの血と涙の結晶ファイルは小池さんの家に届きましたとさ。

※ ファイルは龍口寺の後、立寄った常立寺にあったそうです。T さんご苦労様。
メデタシ、メデタシ（渡部 かほり）

◆ 龍口寺、日蓮宗？そうそう、私には二つの思い出がある。一つは生家の隣に病院があった。仲良しの友達の家でもある。上品なお母さんは、毎日「南無妙法蓮華経…」と数珠を手に唱えていた。うちとは違うな？と子ども心に思ったものだ。もう一つは、ある日着信があった。「うわぁ、小 1 の時の先生からだ！」「今、総本山龍口寺に来てるのよ！」「えーっ、先生日蓮宗なんですか？」…。これらの記憶が、今回の小池さんガイドの龍口寺見学に繋がるなんて…。

今まで、スルッと見たり、コンサートで伺ったり、地層見学に来たりしたことはあったが、こんなに引き込まれるような興味深いガイド付きで見学するのは初めてであった。門の上の彫り物の美しさとストーリーなど、小池さんのガイドと

してのキャリアと心意気で熱く語られるお話は、藤沢人として私の財産となったことは確かである。有難うございました。

渡部さんから「小池さんの忘れ物」事件の顛末を聞いた時の驚きとホッとした瞬間の出来事は微笑ましかった。 (刀根 恵子)

◆ 鵠沼に住んで 50 年ほどになるが、若い頃はよく自転車で散歩したものだ。龍口寺近辺もコースのひとつ。特に高台に建つ白亜の仏舎利塔は眺めがよく、お気に入りの休憩スポットだった。この塔は横浜国大の建築科教授だった大岡実先生の設計になると聞いていた。というのは、私の建築設計事務所勤務時代に入社同期だった M 君が大岡先生の教え子で、この塔の構造設計を担当したという縁である。私にとってこの塔は、その後若くして亡くなった M 君を思い起こさせてくれる塔でもあるのだ。 (十代田 知三)

◆ 三月といっても雪でも舞ってきそうな朝、事務局から寒さ対策をしっかりとってくるようにというメールが入り仕舞いかけていたダウンコートを着ました。

龍口寺さんは処刑場だったせいか、子供の頃からなんとなく近寄りがたいものがありました。

日蓮上人が国の平安と疫病などからの救済を掲げたため、治安を乱すものとして捕らえられ、龍ノ口処刑場へ送られ「首の座」と呼ばれる敷皮石の上にすわらされた。まさに処刑される寸前、江ノ島のほうから強い光が来て処刑役人は眩しさに刑は失敗に終わった。

このように処刑中止されたのは日蓮上人だけであったという逸話を胸に思いました。日蓮上人が佐渡へ送られる前に入れられたという土牢も見ました。佐渡に送られるシーンが五重塔の彫刻に刻まれているのをはじめて知りました。

綿密に準備下さった小池さんの資料はわかり易く、小型マイクまで持参され説明して下さいました。最後には白く輝く仏舎利塔への見学も追加して下さい、その後は有志で隣の常立寺のしだれ梅も満喫しました。 (原 雅子)

第46回 「楷の木を語る」 ― 鵜沼地区公民館まつり

鵜沼地区公民館まつりは昨年コロナ禍で中止となったが、今年は10月15日-16日に開催された。鵜沼を語る会は「楷の木を語る」のテーマで文化活動室で展示した。

2007年から記念植樹として市内の中学校―鵜沼中学校、片瀬中学校、第一中学校、六会中学校、湘南学園、それに鵜沼公民館に「楷の木」の苗木を寄贈してきた。それ以外に鵜沼松が岡公園に植樹している。

楷の木の寄贈を始めてから15年近くになる。その後の楷の木の状態を調べるため、昨年6月「楷の木プロジェクト」を立ち上げメンバーを募った。これまでの楷の木の成長ぶりを調べに各校を訪問。写真撮影と樹高、幹回りを測定、植樹場所の環境も調べた。これらの調査を含めこれまで当会が関わってきた楷の木について、一年延びたが公民館まつりで展示発表できた。



コロナ禍で会場の使い方が例年と異なり、射的など子ども対象の催しに第1, 2, 3談話室が提供された。これまで第3談話室に展示していたサークルは、学習室①、文化活動室などでの展示となった。



新会員も加わって皆で展示作業を

当会の展示コーナー来場者に「楷の木のことをご存じですか」と声をかけると、ほとんどのひとが知らない。楷の木の由来、なぜ「学問の木」とも呼ばれるのか、記念植樹として市内の中学校に苗木を提供して来たことなどを説明すると「子どもが通っている学校にもあるんですね。今度観てきます」など興味深げに話していた。

(文・写真：竹内 広弥)

《昨年の公民館まつり中止を補う意味もあって今年1月17日～3月28日の期間、42のサークルが一週間ごとのパネル展示を公民館ロビーで行った。当会も今回の公民館まつりと同じテーマ、内容で3月21日～28日に展示した》



楷書で書かれたテーマ「楷の木を語る」は刀根恵子会員書



楷の木苗木も展示



うちの学校にもあるかな？

江の島ヨットクラブの発祥

熊川 博（会員）

はじめに

今年 2022 年 3 月 27 日アメリカ・カリフォルニア州ゴールデンゲートブリッジを出港し、6 月 4 日未明、和歌山県日ノ御埼に到着した冒険家堀江健一さんは、小型ヨット（全長 6.05m）サントリーマーメイドⅢ号を操艇し世界最高齢（83 歳）での単独無寄港太平洋横断（所要日数 70 日間）に成功しました。このニュースは TV で大きく報道されましたからご覧になった方も多いでしょう。

スポーツとしてのセーリングは、今から約 300 年前、1720 年にアイルランドにヨットクラブが出来たのが、世界最古といわれています。

その後 1800 年代中期以後、次第に各国にヨットクラブが出来、艇の構造や操艇技術の進歩、ルールの整備が進み、スポーツとしての認知が高まりました。

オリンピックにヨット競技（2000 年からセーリング競技と改称）が取り上げられたのは 1900 年の第 2 回パリ大会からですから伝統がある競技です。

日本のセーリングの沿革

我が国で最初のヨットレースは明治 5（1875）年横浜で行われたといえます。横浜居留地に住んだ外国人によるものと思われまふ。

日本で最初に出来たヨットクラブは、横浜アマチュアローイング倶楽部内に、明治 19（1886）年に設立された横浜セーリング倶楽部であります。つまり手漕ぎボート倶楽部内に帆走倶楽部ができた訳です。昭和 7（1932）年には日本ヨットクラブ協会が設立され、この頃から各大学にヨット部が相次いで創設されたのであります。

日本のセーリング競技、オリンピック出場などは大学ヨット部の活動が中心でありました。東京大学（'34 年創部）、早稲田大学（'32 年創部）、同志社大学（'33 年創部）、慶應義塾大学（'32 年創部）のヨット部員等が社会人となって実業団ヨット部を作りオリンピックを目指して切磋琢磨し、その創生期を作りました。

日本のオリンピックヨット競技への初出場は 1936 年の第 11 回ベルリン大会です。その後オリンピックは 1940 年の第 12 回東京、1944 年の第 13 回ロンドンが

決まっていたが第2次世界大戦のため中止となり、1948年に第14回大会がロンドンで開催されましたが、敗戦国のドイツと日本は招待されませんでした。

日本がオリンピックに出場するのは、1952年、第15回のヘルシンキ大会まで待たねばなりませんでした。

日本のセーリング界に最も貢献した人は小澤吉太郎（1907～1987：中央大学出身）といっても過言ではありません。

小澤吉太郎は1952年夏フィンランドのヘルシンキで開催されたオリンピック大会のヨット競技日本代表チーム監督を務め、1964年の東京オリンピックのヨット競技を成功させた立役者ともいえる人物です。



マドロスパイプを咥えセーリングを楽しむ小澤



小澤吉太郎

江の島ヨットハーバー・クラブハウスの建設

1959年5月に1964年夏のオリンピック会場が東京に決まると、小澤吉太郎はヨット競技の開催場所の選定からコース、関連施設の建設といったハード面と運営にかかわる資金調達やホストクラブ設立といったソフト面とに深く関わるコアメンバーとなり、1960年夏ローマオリンピックのヨット競技代表監督になった堀江喜三（早稲田大学出身）とフィン級（一人乗りクラス）の代表選手山田水城（東京大学建築科卒工学博士：当時31歳）の両氏にヨットハウスの建築を勉強して来いとローマに送り出しました。



山田・谷口両氏設計のヨットハウス

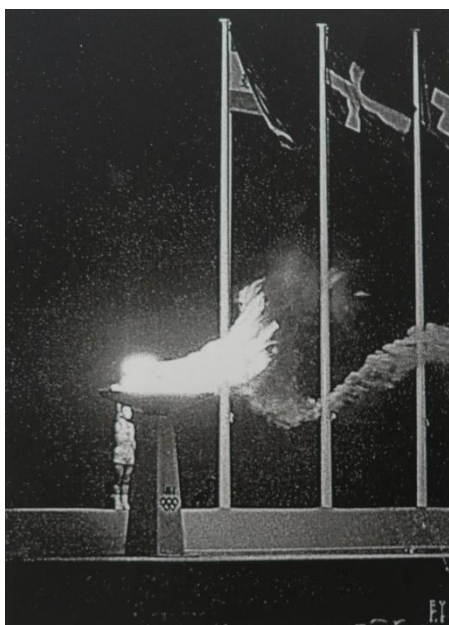
山田選手の成績は26位でしたが帰国後、小澤は山田水城と建築家谷口吉郎の両氏にハウスの設計を依頼しました。

1961 年より江ノ島のヨットハーバーの土木工事が始まりました。

当時の江ノ島は島との連絡は歩道橋だけで、資機材搬入用の自動車専用道路の築造、陸上に十分な材料置き場が無い為にコンクリートでテトラブロックや基礎ブロックを作るのは葉山で製作し海上を曳航したそうです。

1964 年東京オリンピックを迎えた時は、ハーバーと海の境界として防波堤を設置して海とハーバー内を仕切り、海に向かって右側をディンギーゾーン、左側をクルーザー係留ゾーンに分けていました。

その防波堤に聖火台が設置されており、ヨット競技が始まる時には、夜のパーティー後 2 名の大学ヨット部員がオールを漕ぐローボートで聖火ランナーを運び防波堤に上陸させて聖火点灯式を行ないました。



1964 年 聖火点火



現存する聖火台

写真を見ると夜ですから幻想的に演出されています。その聖火台が現在、江の島ヨットハーバー内に保存されているところは、ハーバー改修で防波堤はスロープと陸続きになり樹木を植え公園化されています。又、クルーザー係留ブロックとディンギーブロックの仕切りの役目を果たしています。

江の島ヨットクラブの創設

次に小澤吉太郎は東京オリンピックを江の島ヨットハーバーで行うに当たりホストクラブを設立させました。神奈川県知事内山岩太郎を名誉会長に迎え、江の島ヨットハーバー建設に関係する多くの企業を江の島ヨットクラブ特別会員として入会させて基金を集め、一方では、知事を中心に政治家等にも参加協力を呼びかけ、自身は理事として設立・運営の陣頭に立ちました。



東京オリンピックヨット競技に参加する選手にノルウェー王国ハーラル皇太子（現ノルウェー王国国王）が出場する事になり、天皇陛下がセーリング競技を観戦する事も決まり、天皇陛下を乗せるクルーザー「やまゆり」を建造する事も実現させました。建造された艇は江の島ヨットクラブ所有艇として活躍し、現在はやまゆり保存会に所有移管して愛好者が維持管理、セーリングを続けています。

このことが縁となって江の島ヨットクラブでは現在もノルウェー王国と交流を継続しており、毎年春に江ノ島で「ノルウェーフレンドシップレース」を開催、ノルウェー大使も参加するイベントとしてレースを楽しんでいます。

江の島ヨットクラブ・ジュニアの設立

1964 年東京オリンピックヨット競技では地元開催の有利さがあったにも関わらず、結果は惨敗の成績でありました。ここから小澤吉太郎は翌年に江の島ヨットクラブジュニア（EYCJ）を設立しました。

「レースに勝つ子供を育てるためのジュニア部門ではない。（結果的に勝つのはうれしいが）子供達にヨットの楽しさを味わわせる事で、自身がいかに自然を友として学び育っていく事を目的にする」

という小澤吉太郎の言葉が EYCJ を象徴しています。

又、日本のヨット界で主流であった大学ヨット部 OB 中心では限界がある。立て直すには欧米のヨットクラブのように、大人達がジュニアセーラーを育成し、教育を受けた子供達が成長すべきであると小澤は考えました。

先輩から後輩へ、ベテランからビギナーへ、親から子へ、海で得た自らの知見

を伝えるには、江の島ヨットクラブの中でシニアとジュニアのコミュニケーションと教育が必要という考えに至ったのです。「海を継ぐ者たちを育てる」という発想が日本に欠けていると反省したのです。

このアイデアに共感したのがカイ・ヲールハルト (Kaj Wolhardt) で具体的にジュニアの設立を計画いたしました。カイ・ヲールハルトは Royal Danish Yacht Club のメンバーで、1948 年ロンドンオリンピックにおけるデンマーク・ヨットチ



カイ・ヲールハルト夫妻

ームの監督で、ヨットの神様と呼ばれオリンピックヨット競技4連覇を成し遂げたポール・エルブストロームを育てた人で実業家でもありました。

1960 年当時は既に 10 年近く東京で貿易会社を経営し、日本とデンマークを行き来しビジネスをこなしながら、日本のヨット界に親しみ、江の島ヨットクラブには設立とともにクラブの理事として参加しました。

ヲールハルトの持論は「ヨットは青少年の人格形成に役に立つものである」というものであり、1965 年 2 月、彼は小澤吉太郎宛に江の島ヨットクラブのなかにジュニア部門を設ける提案書を出していました。

その提案書には、「スポーツに関連して、ただヨッティングの教育的見地からばかりでなく、健康と楽しみを増大する余暇の善用、ひいては日本の生活基準を向上させるために、社会の福祉と青年の利益の為に用いられる公共の資金を受ける為に、少年団又は少年の為に政府又は公共の施設が設置されるべきである。スポーツ競技の社会を国際的にみると、ヨット界では青少年のこのような活動はヨットクラブが後援し運営している。このような活動は、日本の社会と海とのつながり、スポーツ愛好精神、人口増加などに支えられて日本でも普及し正当に評価されるものと信ずる」と書かれています。

1965 年 2 月の提案から 3 か月後、同年 5 月の江の島ヨットクラブの理事会で承認され、歴史的な一歩を踏み出したこのスピード感には小澤吉太郎とカイ・ヲールハルトを中心とした江の島ヨットクラブの創設時の理事たちが、いかにジュニア

の育成に思いを込めていたかがわかります。

カイ・ヲールハルトは同時に Royal Danish Yacht Club から江の島ヨットクラブにオリンピック開催のお礼としてオブティミストディンギーを6艇寄贈する橋渡しをしました。このデンマークから届いた木造ニス塗りのオブティミストディンギーこそが、その後の日本におけるジュニアセーラーの先輩が乗艇したのです。

江の島ヨットクラブジュニアの1期生、2期生はどうも江の島ヨットクラブの会員の子弟に限られていたようですが、活動が知られるようになった3期生、4期生の頃になると、会員以外の家族から入会する子供達が出てきました。この頃から家族的な集団から、組織的な集団に変わったのです。指導に際して、親が口をはさむ事はなく、一切が指導者に任されました。それだけに指導者達の責任は重かったのです。

人間愛の金メダル

1964年のオリンピックのヨット競技では、参加国40カ国、競技種目は5種目、競技日程10月12～21日（中3日の休み）実質7日間でした。

大会では初日の10月12日行われたフライング・ダッチマン級の競技で、優勝候補のスウェーデンのエキル兄弟は後続のオーストラリア艇のウィンター選手が強風にあおられて海に転落したのに気づき100mもコースを戻って救出、それからコースに戻り結局11位でゴールしたもので「人類愛の金メダル」と呼ばれるエピソードが残っています。



なお、ヨット競技は2000年シドニー大会からセーリング競技と呼ばれるようになりました。

江ノ島で二度目のオリンピック・セーリング競技開催

2020東京オリンピックは新型コロナウイルスの流行のため1年ずれ込んで2021年に開催されました。各競技会場は「東京を中心にコンパクトに」がコンセプトでしたが、セーリング競技は今回も江ノ島が会場になりました。

1964年のオリンピックでは、江ノ島に日本初の競技用ヨットハーバーとヨット

ハウスが建設され、海に汚水が流入せぬよう、同年 8 月には江ノ島、片瀬、鵠沼地区の下水道と污水处理場が完備されました。



2014 年に出来た新クラブハウス

このとき建設された山田・谷口両氏設計のヨットハウスは塩害による老朽化が進み、2014 年にヘルム+オンデザインパートナーズ設計による新クラブハウスに建て替えられていたことも誘致につながったのです。

ちなみにオンデザインパートナーズ代表・西田司（にしだおさむ）は鵠沼に実家がある建築家です。

「東京オリンピック 2020」のセーリング競技は、参加国 65 か国、競技種目は 10 種目（男子・女子・混合）、競技日程 7 月 25 日～8 月 4 日のべ 11 日間であり、1964 年の時と比べると、参加国で 5 割増、競技種目で倍増、競技日程も 5 割増です。



©PHOTO KISHIMOTO

日本チームは全種目に出場し、成績は男子 470 級（岡田・外園チーム）女子 470 級（吉田・吉岡チーム）がそれぞれ 7 位に入ったのが最高でした。

＊

ヨット競技の発祥、日本のヨット競技の沿革、1964 年の東京オリンピックヨット競技の準備から、江の島ヨットクラブ設立、オリンピック終了後の強化と普及の為にジュニア部門の設立、「東京オリンピック 2020」セーリング競技、について、ザットご紹介しました。

日本のセーリング競技の強化と普及は小澤吉太郎やカイ・フォールハルト達が夢見た通りになったのでしょうか。結果は、未だ道遠しで、決して満足ゆくもので

はなかったと思います。

ただ、江ノ島の海に浮かぶヨットは増え、鵜沼の海岸はマリンスポーツのメッカにはなりました。

又、機会があればこのあたりを調べてみたいと思います。

ヨットといえば…

皆さんは「ヨット」という言葉の響きに何か郷愁を感じませんか？

年配の方は「ヨット鉛筆」を思い出されるでしょう。ヨット鉛筆株式会社は大正5年創業、昭和42年まで操業。一時はトンボ、三菱とともに三大メーカーでした。

もう少し若い方は「富士ヨット」印の詰襟の学生服を着た思い出のある方もあるでしょう。昭和27年創業、岡山県倉敷市のメーカーの商標です。

また小学校4年の音楽の時間に「ヨット」を歌った方も多いかも知れません。

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1) 波をけて うねりを乗り越えて | 2) 風をうけて ななめに傾いて |
| 白い帆のヨットが 走る走る走る | 赤い帆のヨットが 走る走る走る |
| 海は広い 広くて青い | 海は広い 広くて青い |
| 風の歌は ピープー | 風の歌は ピープー |
| かもめの歌は ギョー ギョー | かもめの歌は ギョー ギョー |

作詞した佐藤義美（1905~1968）は、誰もが知っている「犬のおまわりさん」を作詞した人です。彼はヨットが大好きで60歳を過ぎてから逗子市桜山に仕事場を持ったときヨット Y15 を購入。葉山マリーナに係留してレースに参加するほどでした。この歌は走るヨットに乗っている爽快感そのものではありませんか。

（くまかわ ひろし）

引用・参考文献

「海を継ぐ者たち」一般社団法人 江の島ヨットクラブジュニア部 発行
一般社団法人 江の島ヨットクラブ HP

“消え去った鵜沼弁” 標準語との対比

並木 宏之（会員）

序論

1) 時代の移り変わり

鵜沼皇大神宮の史実によれば、その創建は平安時代の第 53 代淳和天皇の天長 9(832)年とされていることからみて、この地には奈良時代以前より定住していた人々がいたと想定される。

その後、この神社は相模国土甘郷の総社となり鵜沼は脚光を浴びる。平安時代の後期、永保 3(1083)年「後三年の役」で初陣を果たした鎌倉権五郎景正が鵜沼村を含めた東は境川から、西は小出川に至る大庭荘（おおばのしょう）一帯の地域を大庭御厨（おおばみくりや）として伊勢淳宮に寄進し、この地を支配した。そしてその後は子孫にあたる大庭一族に後継を委ねた。

また、「前九年の役」（1051~1062 年、断続的に続いた）で奥州鎮撫に出向いた八幡太郎義家が勝利を期してこの神社に祈願奉啓したとも言われている。更に那須与一は屋島の合戦で平家軍に向って放った矢が命中して功を遂げた後、弓一張と矢を献納し神思奉謝したとされている。

明治元(1868)年には、征東大総督の有栖川宮が東下途中に、この神社に参拝「神明宮」の御染筆を残したとされていて、これが鵜沼の住民にこの皇大神宮を「神明様」と呼ぶようになった起因だと思われる。

明治新政府になると近代化の急速な進展を目指し、人民の教育が重要視され各地に小学校が設立されて、全国統一の標準語が推進され長い間定着して来たであろう各地の俗語（方言）も変化修正の方向に向かう傾向が見られるようになって、ここに新しい俗語の形成が成立していったのではなかろうか。

鵜沼弁もこのような過程を経て明治の初期頃から日常生活用語となって来たのではなかろうか。

2) 鵜沼弁の発掘対象区域

原点を探れば上記の平安時代末期に成立した相模国土甘郷鵜沼村を含む大庭御厨と称されていたこの地域一帯で使われていた言語は、ここで述べる鵜沼弁

と同様のものではなかったろうか。

ここでは対象をさらに縮小し、西は引地川、東は小田急江ノ島線、北は皇大神宮近辺の間に古くから居住していた半農半漁の人々や小学校の友人たちから若年の我が身の聴覚を通じて仕入れたものに限って記述した。

この地域は旧の部落名でいえば上村（かむら）宮の前（みやのまえ）宿庭（しゅくにわ）清水（しみず）大東（おおひがし）仲東（なかひがし）荻田（かりた）原（はら）堀川（ほりかわ）である。

時代の対象は大体、昭和 10~20 年代であり、当時のここでのいう鵜沼は 1/4 は水田、1/4 は畑地であり多くの砂山が点在し水溜まり（池）が相当数あった。また小田急線の線路に沿った東側は南北に延びる広大な畑地であったが農家は全くなかった。（p23 鵜沼弁対象地域図照）

鵜沼弁の特徴

1) 口調 その抑揚パターン

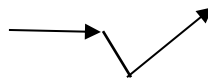
顕著なのは人名の愛称「○○ちゃん」と呼ぶとき

名前の後、音程がいったん下がって語尾が上がる

しんちゃん

じろちゃん

ええ子ちゃん



この抑揚は上記人名のみならず各品詞にも該当する。

お前よー → おめえよー それでよー → そんでよー

---をやろうよ → ---やんべえよー

2) 「ん」の発音への変化

- 「る」で終わる動詞の「る」→「ん」に変化（最後に「よ」又は「べえよ」がつくことが多い）

やる → やんべえ(よ) 見る → 見んべえ(よ)

走る → 走んべえ(よ) 登る → 登んべえ(よ)

寝る → 寝んべえ(よ) 起きる → 起きんべえ(よ)

- 「いる」（状況・存在）という動詞の特性

犬がいるだろう → 犬がいんべえ

前に別の動詞が連続し副詞的役割を示す場合

止っているだろう → 止ってんべえ

「いる」の「る」が「ん」にならず「いる」という動詞全体が「ん」になる

● 各種の助詞が「ん」に変化

イ) 主格を示す助詞「が」「は」→「ん」に変化

あとは俺がやるからよ → あとん俺んやんからよ

ロ) 所有格を示す助詞「の」が「ん」に変化

その靴は俺のだろ → その靴は俺んだんべ

ハ) 目的格を示す助詞「を」「に」が「ん」に変化

あいつのうちに行こうよ → あいつんちん行くべよ

あそこの籠を持って来いよ → あっこん籠ん持って来いよ

● 未来形を示し助動詞の役割を果たし推測、誘導を表現する「…しよう」

「…だろう」の「よう」「ろう」→「んべ」に変化

勉強しよう → 勉強しんべ

それは夢だろう → それは夢だんべ

〔例文〕標準語（それに近い語）

おまえよ、あそこに蝉が止っているだろ。早く籠を持って来いよ。

それでよ、おまえの網で捕ってしまえよ。

鶺鴒

おめえよー、あっこに蝉ん止ってんべえよ。早く籠ん持って来いよ。

sondeよ、おめえん網で捕ちめえよ。

※ 蝉が→ん（主格）、籠を→ん（目的格）、おまえの→ん（所有格）

止っている→ん（特性動詞）

3) 強調表現（特に形容詞に多い）

標準語（2文字目を長く発声する）

さむーい あつーい うまーい まずーい

鶺鴒（最初の文字を長く発声する）

さーめい あーちい うーめえ まーじい

4) 人称表現

人称	性	単数	複数
一人称	男	おれ・おら	おらっちゃ
	女	あたし・あた	あたしら
二人称	男	おめえ	おめっちゃ
	女	あんた	あんたら
三人称	男	あいつ	あいつら
	女	特になし	特になし

5) 標準語と鶴沼弁の関連（同一行間、段違い変化）

明治新政府は明治 5 年に全国に小学校を設立し、これを教育制度の基礎とする案件を考案し、明治 14 年には「小学校教則綱領」を明文化し、さらに明治 19 年に「小学校令」を公布し義務教育制を制定した。これに則り日本語の全国統一化を期して標準語が全国に広められ、半強制的に推進された。これを受けて鶴沼でも奈良平安時代よりこの地に居住し定着した旧鶴沼弁が生活を支配し続けてきた中で、慣れない標準語が登場してきても違和感と羞恥心に阻まれ、しゃべり易く独自に変化させた言語が生まれ、これが鶴沼弁となり、日常生活用語として定着したものであろうと推察される。

したがって、この鶴沼弁は標準語が基礎になって「あいうえお 51 字表」の中で規則正しく同行間で段違いに変化したものになっているように表現されていると考えられる。

同一行間段違い変化表（第 1 段、第 2 段が第 4 段に変化するものが多い）

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	
あ	あ	<u>か</u>	さ	た	<u>な</u>	は	<u>ま</u>	や	<u>ら</u>	わ	ん
い	<u>い</u>	き	し	ち	に	ひ	み		り	ゐ	
う	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る		
え	<u>え</u>	<u>け</u>	せ	て	<u>ね</u>	へ	<u>め</u>		<u>れ</u>	ゑ	
お	お	<u>こ</u>	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を	

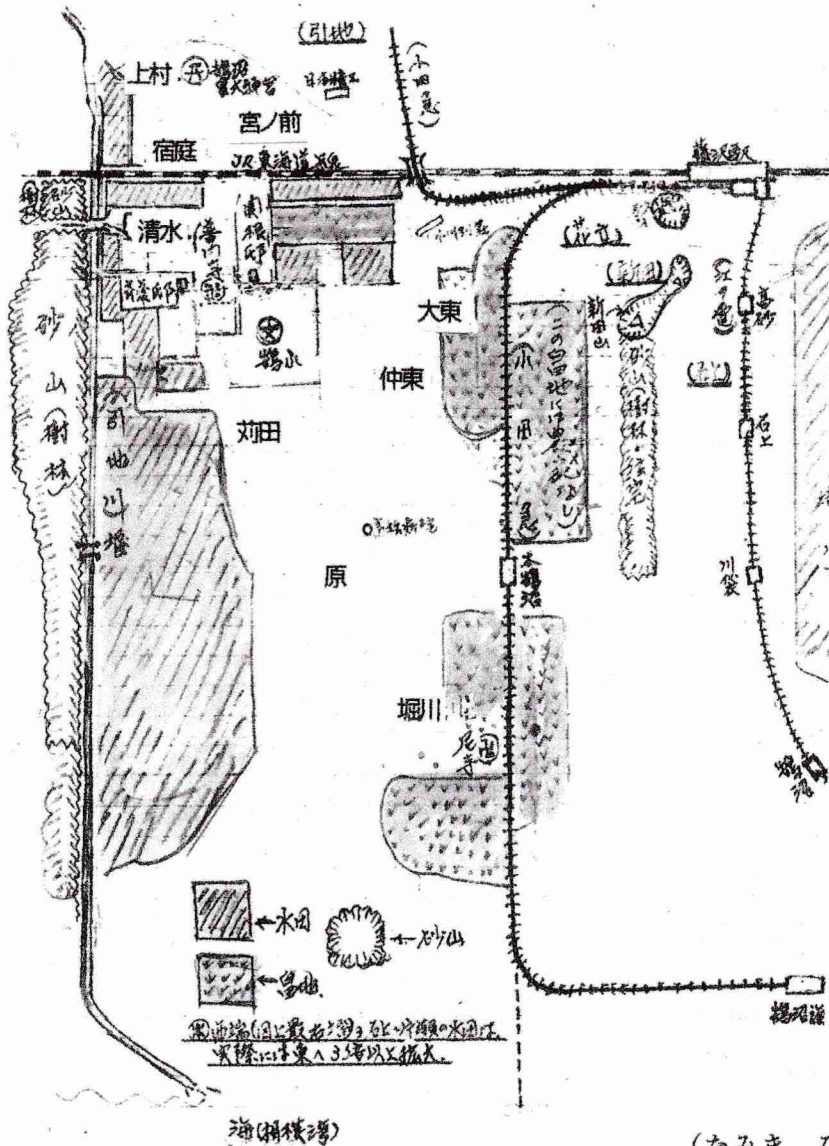
同一行間段違い変化例

	あ段	い段	う段	え段	お段	備考
あ行		こいよ	→		こおよ	来いよ
か行	かえる		→	けえる		帰る
	たかい		→	たけえ		高い
		ひきい ←	ひくい			低い
				こけへ ←	ここへ	ここへ
	かいた		→	けえた		書いた
さ行		おしえる	→	おせえる		教える
				おせえ ←	おそい	遅い
		まじい ←	まずい			不味い
た行	たいこ		→	てえこ		太鼓
		あちい ←	あつい			暑い
	だいく		→	でえく		大工
な行	ない		→	ねえ		無い
は行	しばい		→	しべえ		芝居
	やばい		→	やべえ		やばい
ま行	おまえ		→	おめえ		お前
	あまい		→	あめえ		甘い
	まいにち		→	めえんち		毎日
		さみい ←	さむい			寒い
や行	はやい		→	はええ		早い
	しゃんめえ	←		しょうがない		仕様が無い
ら行	えらい		→	えれえ		偉い
	おらっちゃ		→	おれたち		俺達
わ行	こわい		→	こええ		怖い

6) 単独で定着した特殊用語の例

あっこ (あそこ)、おまんま (ご飯)、おらが (おれの家)、おんじょ (銀やんま)、かんべそう (かわいそう)、しやんめえ (しょうがあるまい)、そけえ (そこへ)、「…だ」せえって (「…だ」といって)、どけえ (どこへ)、どっか (どこか)、めえんち (まいにち)、げえもねえ (芸もない=工夫のない：つまらない)

7) 鶺鴒沼弁の対象地域図



チョッと見てみよう

むかし「東屋」周辺の道路幅は

すべて一間（約 180cm）だった

有田 裕一 （会員）

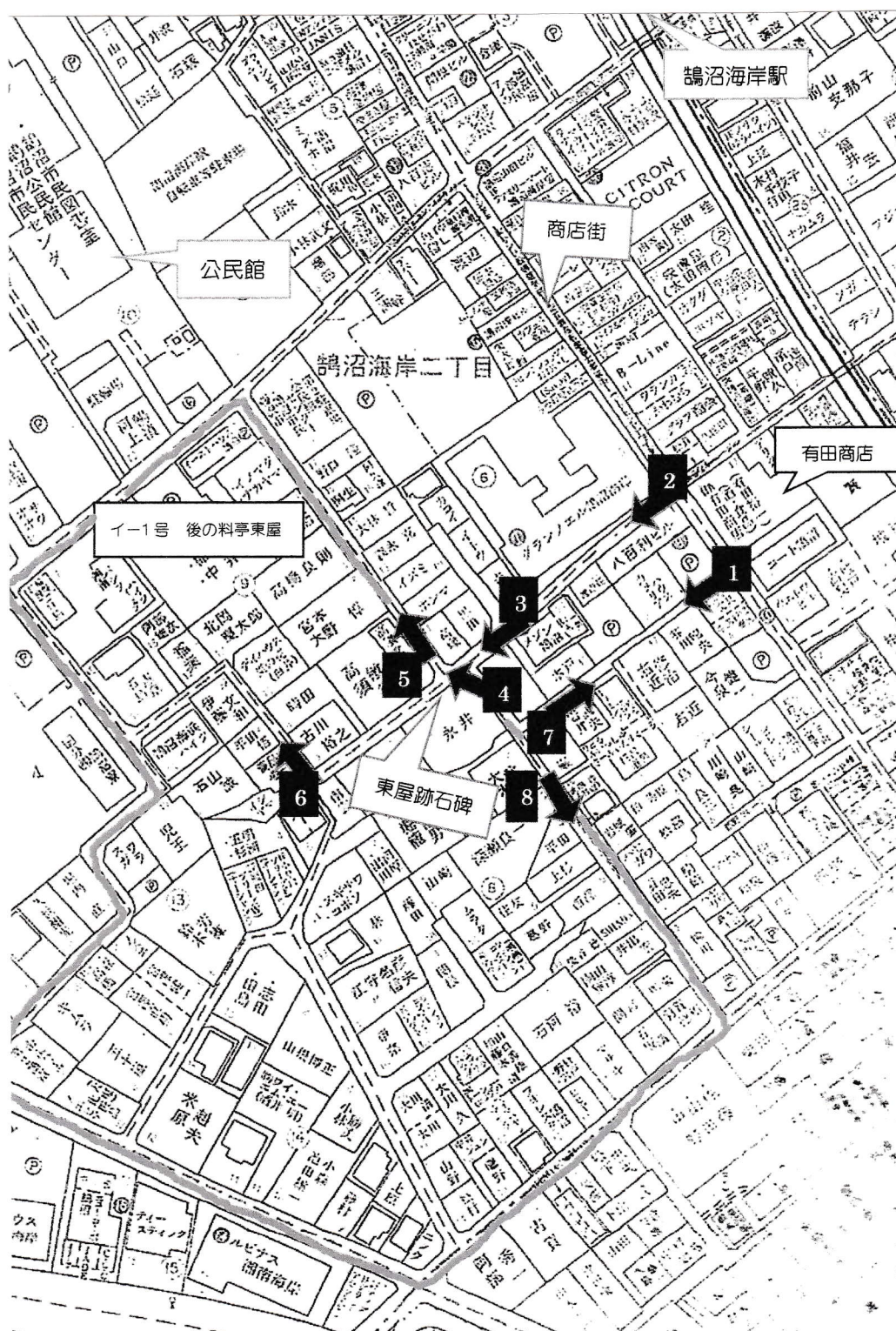
東屋本館は明治 30 年代に建築されたといわれている。ここへの宿泊客のアクセスは、東海道線(明治 20 年開通)藤沢駅からで、江ノ電が開通した明治 35 年以降は鵜沼駅を降りた客は、駅前に待機していた人力車を利用、藤ヶ谷橋から大曲りを通り、東屋玄関へ到着したものである。

自動車は勿論無かったので、道路幅は人力車が通れば事が足りた。

時代が流れて現在は建築法の関係で徐々に道路は拡幅され現在では一部を除いて車が通行出来るようになった。幸い道路の中に元のポイントが残っていたので 2022 年 4 月の状態を写真に残した。その後 5 月に古くなったガス管の取換工事後の舗装でポイントが埋もれて大分少なくなってしまったのは残念である。東屋の借家イ-2号、イ-3号、イ-4号の前の道(写真①⑦)は昔の幅のままなので、当時を偲ぶ散歩コースとしてお勧めである。イ-4号には芥川龍之介が住んでいた。文学者の日常通った道を歩いてみるのも面白い。 (ありた ひろかず)



震災前、商店街から東屋入口に入る角にあった「そばや 明月庵」(後の有田商店)



次ページ以下の写真の場所と見た方向

①



②



③



④



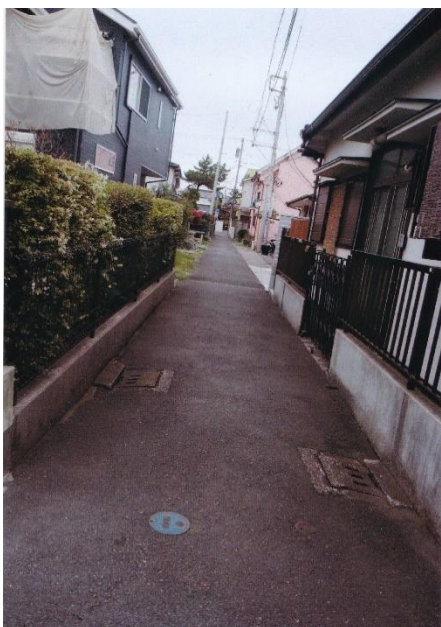
⑤



⑥



⑦



⑧



コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

浜口庫之助氏との邂逅

夢、もう今や五十数年位前のことである。

私は仕事での海外出張からの帰国の航空機の中の座席で、偶々見覚えのある音楽家と隣り合わせになった。

彼は確か私より 10 歳程は年長だが同じ神戸市生まれであり、昭和 20 年代後半に灰田勝彦とともに参加していたハワイアンバンドからジャズ・コーラス・グループのリーダー・シンガーとして独立し、その後は数々の軽妙なタッチのヒット歌謡の作詞作曲家として有名となった。例えば「黄色いサクランボ」「僕は泣いちゃ」「涙くんさようなら」「愛して愛して愛しちゃったのよ」「星のフラメンコ」「バラが咲いた」等々で一時は大衆の大きな人気を得た浜口庫之助氏であった。

若い頃からかなり熱心なジャズファンであった私は、やや年上だがほぼ同世代のこの浜口氏と思いがけず間近くに遭遇し、いわば自らの青春の思い出を突如よみがえらせて、意気込んで身を乗り出し、当時からのジャズの潮流やミュージシャンたちの動静などを共に語り合おうとした。

ところが、驚いたことに会話は私の思ったようには噛み合わないのである。興奮気味の私の話題提起に対して、彼はまことにいい加減なきわめて鈍い反応しか示さない。

そしてやがて、訝しげな表情をしたに違いない私に、彼はいった。

「あなたはファンとしてのご自分が最も熱中された時代の音楽をいつまでも楽しんでおられ、色々詳しく覚えておられるのですね。それはあなたにとっては趣味なんだからそれで結構だし、とてもいいことなんです。でも私は違います。私は音楽のプロです。いつ迄も二十年も三十年も前の音楽を懐かしんだり、楽しんだりしている暇はありません。現代の聴衆の皆様の好みに合わせて、更にそれを少しでも先取りして、常に新しいものを追いかけては商売にならないんです。

あなたが今お話になっているような音楽を私もかつては一生懸命やりましたよ。でも、それはもう遠い昔のことです。ほとんど忘れてしまいましたよ」と。それを聞いて、私は愕然とした。しかし考えてみれば至極当然のことである。

どんな仕事であろうとプロであることはきびしい。(内田 進之助)

コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク

海水浴の思い出

今年の関東地方は記録的な猛暑で連日、熱中症警戒情報が出され年寄りの体にこたえた。鵜沼の住民にしてみれば海水浴で体温を下げたいところであるが、74歳の私としては50年余り、海水浴はしていない。少年時代に経験したきれいな鵜沼海岸でなくなったからである。

鵜沼海水浴場がきれいだったのは、私が小学生のころまでだと思う。1960年代に入ると湘南は手軽な海水浴場として多くの人で賑わうこととなった。土曜、日曜日は芋の子を洗う盛況ぶりであった。家の前を朝早くからパラソルを持った海水浴客の木のサンダルの音が響き、私も早く海に入りたいと気もそぞろであった。上空では報道機関のヘリコプターが人出を撮るため旋回していた。帰りの電車は満員で日焼けした体から発する熱で不快であった。土日の夕方ほどの家も風呂の水を溜めるため水道の水圧が下がり蛇口から細い水しか出なかった。



中央が筆者

中学生の頃から日本の経済成長にエンジンがかかり始めた。下水道は整備されておらず排水や廃棄物が川へ流れた。ビニールやプラスチックが海に流れ込み体にまとわりついて不快な思いをした。

鵜沼海岸がまだきれいだった頃は、波が碎ける瞬間に魚が泳いでいるのが見えた。水中メガネ（今ではゴーグルという）を着けて見ると海底やかなり先まで見通せた。海から上がり甲羅干しすると塩の香りがした。鵜沼海岸の砂浜は、波打ち際までかなりあって広がった。子供の足で結構歩いた記憶がある。昭和39年東京五輪のヨット会場の建設で潮流が変わり、砂浜が侵食されたということを聞いたことがある。当時の砂浜はまだ自然豊かで貝拾い、夜には懐中電灯でカニ穴を見つけたりして色々な遊びができた。

海水浴客で溢れた鵜沼海岸は、9月になると人出がピタリと止んだ。海で遊ぶ歓声と賑わいが戻ってほしいと思うほど寂寥感が漂っていた。昔、トワエモアが歌った「誰もいない海」の歌詞そのものの風景が広がっていた。（大川 久）

鵠沼の赤蛙は美味しい

岡田 哲明（会員）

日本赤蛙は在来種のニホンアカガエル、近縁種のヤマアカガエルをいう。食用の蛙は 1918（大正 7）年、東大教授渡瀬庄三郎がアメリカのルイジアナ州ニューオリンズから輸入した 17 匹のアメリカアカガエルを横浜港に陸揚げしたのが最初といわれ、その啼き声からウシガエルと呼ばれている。農商務省はこれの養殖



ニホンアカガエル

を奨励したが蛙食文化は定着しなかったようだ。

ウシガエルは大雨の時逃げ出して野生化し、今では日本全国に生息していて「日本の侵略的外来種ワースト 100」に選定されている。

蛙を食べる風習は古くから欧米にあって、フランス料理に出てくるグルヌイエュはヨーロッパトノサマガエルであるという。

さて、蛙食についてウシガエルではないが、ここに林達夫が書いた実に興味深い手紙が残っているのでご紹介する。

1921（大正 10）年、高瀬弥一はすでに藤が谷の広大な敷地を手放し、川袋へ移っていた。

その 8 月、当時、林達夫は鵠沼川袋の高瀬邸に滞在中で、丁度、高瀬芳と結婚する前年、即ち京大文学部哲学科選科へ行くことにした夏に親友の谷川徹三と久保正夫（妻は谷川の姉）とに出した手紙である。

一昨日はヨコハマに行きました。グランド・ホテルやオリエンタル・ホテルの立並んだ海岸通では、大勢の毛唐に逢いました。あの通りや、その付近の商街は、中々いいと思いました。蛙のお料理を食べましたが「青」で不味うございました。

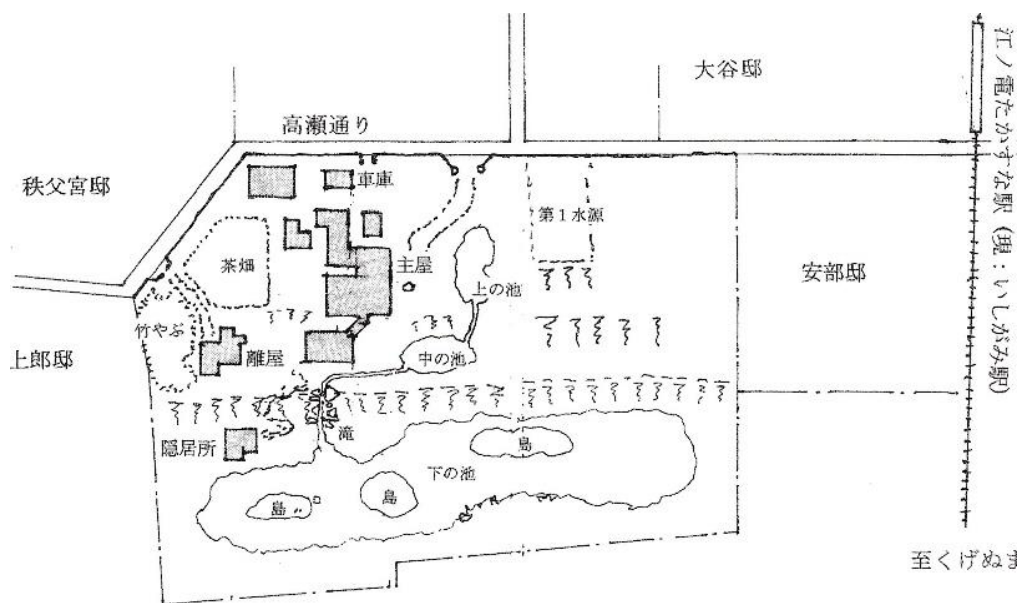
蛙といえば、この頃は毎日赤蛙を食べています。随分おいしくって、今日も午後、外に捕りに出掛けました。ここにいて、新鮮なトマトを朝、昼、晩食べられることと、赤蛙を食べられることと、は何よりです。

－1921/8/22 谷川徹三宛 封書－

私は十七日から当地に来ています。海に行ったり松原や砂丘を散策したりして
くらしています。そして毎日新鮮なトマトを、赤蛙とを食べています。

—1921/8/31 久保正夫宛 葉書—

赤蛙は美味で「青」は不味いと林という。鵠沼の赤蛙とはニホンアカガエルか
ヤマアカガエルであろう。「青」はトノサマガエルらしい。ホテルのフランス料理
か、横浜中華街でも食べたのであろうか。



上図は藤が谷から石上へ移った高瀬邸の概略図である。5000 坪の敷地は北側半
分が高台、南側半分が沢地であった。高瀬笑子の著書『鵠沼断想』によれば、「こ
の低い沢を掘って人口の池を作った。上の庭の一隅の池に水を通し、その水は細
い流れを通して次の小さい池に入り、また小溝を迂回して流れ、滝となって下の
大きい池に落ちるといような贅沢な林泉である。」と書かれている。林が毎日タ
モを持って草叢をキョロキョロしながら蛙を探す姿を想像するとほほえましくも
なる。「そとに捕りに出かけました」というからには周辺の田圃や川袋あたりまで
足を延ばしたのであろう。

獲物の調理は女中か、婚約中の芳だったのではないか。皮を剥ぐのも内臓を取
るのも気味が悪かったに違いない。女共の迷惑をよそに一人美味しい美味しいと悦に
入っていたのだろうか。あるいは林自ら包丁を手調理したものであろうか。調
理法には全く触れられていないので、どんな料理だったかは全く分からない。

古来、たしかに蛙を食べる風習は日本各地にあった。山間部では手軽に手に入る貴重な蛋白源だったようで、主に串焼きにして食べたらしい。ヤマアカガエルはウシガエルより美味しいという話もある。戦中戦後の食糧難時代にカエルを食べた経験のある人は筆者を含め、結構おられるであろうが、ウシガエルだったことが多い。

林はいつどこで蛙を食べることを覚えたのだろうか。父が外交官だった関係で2歳から6歳までシアトルで育っているから、アメリカで食べた経験があったか。

* * *

林は翌1922年の5月27日、高瀬芳と結婚し四軒別荘（現住居表示：鵜沼松が岡3-13）を借りて新居とする。

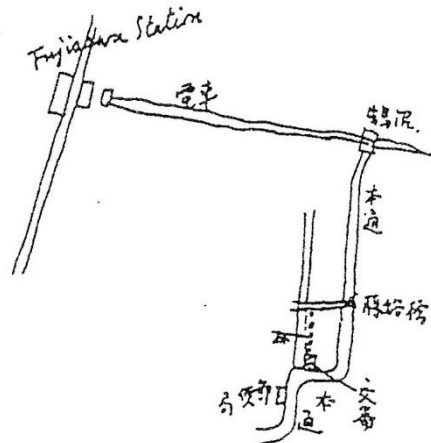
今度私が借りることにした家は、私がかつて気に入ったとお話し、それが駄目だったともお話ししたその家です。十六日から掃除をしたり障子洗いをしたり、畳替えをしたりさせています。二十一日から入れるようにしたい積りです。――

ホッホツァイトは二十七日、横浜のグランド・ホテルで、ごく身内のものだけであげる予定です。

－1922年5月20日 久保正夫宛 葉書－

この家に引き越して来たはじめ頃に畑に
まいた赤い二十日大根がこのごろやっと食
卓に上るようになりました。おいでの時
には前以て出来るなら汽車の時間をお知らせ
下さい。もし、前以てお知らせ下さるわけ
にゆかないときのために、次に地図を書き
ましょう（もっとも鵜沼停車場を下りて、
そこの俵屋なり茶屋なりで、四軒別荘の林
っておきき下されば教えてくれますが）

－1922年7月3日 久保正夫宛 封書－



そして翌年、林は四軒別荘で関東大地震に遭遇するのである。

一同無事で元気でおりますから、ご安心下さい。鵠沼辺りは地震は恐ろしいもので、殆どすべての家が文字通りぺしゃんこに押しつぶされましたが、何しろ食料は割に豊かだし、火事もなし、あとは却って他の地方より気楽です。僕の家も全壊しましたが、実にいい按配に芳子と赤ん坊とが寝ていた座敷の寝床の、而も、皆が寄り固まって赤ん坊をかばった場所一間四方だけに穴が明いて、空が見えて、そこから楽々出ることが出来ました。

地震後つなみを心配して山の方へ避難すると、千葉医事校長の三輪博士に会いその方の宅は割にいいので、来るように勧められ、今はそこで大変親切にもてなされています。そこには物置が二つあり、一つは先方、一つは僕たちが這入っています。かかる災害の際としては極めて贅沢に暮らしています。

—1923 年 9 月 7 日 谷川徹三宛 封書—

このとき、芳の実家高瀬邸も倒壊した。この高瀬弥一が建てた家は、「そこに藤が谷の家とは大違いの粋な数寄屋造りの家を建てた。関東大震災の直前の事である。美しい三河の瓦の屋根、軒が長く、周り廊下のところどころの柱は細く、数も少なかった。こういう華奢な作りであったから、大震災ではひとたまりもなくぺしゃんこになってしまった。地盤が悪かったのではない。家のデザインが地震を考慮に入れてなかったのだ。」と弥一の長女高瀬笑子は後に書いている。

震災の直前とはどのくらい前か、『鵠沼』89 号「鵠沼と高瀬家の百年」鵠沼人高瀬弥一を執筆した渡部瞭会員の記述では大正 9(1920)年 9 月であるという。

四軒別荘で震災に遭遇した林は、一時、鵠沼海岸に、ついで川袋に転居したが昭和 12(1937)年、六会にあった古民家を買ってその古材を用いて自ら設計した英国風田舎家を鵠沼桜が岡に建て終生そこに住んだ(会誌鵠沼 101 号)。その家は、国の登録有形文化財に指定され現存していることは皆さんご承知の通りである。

＊

鵠沼のアカガエルの話が、後半は関東大震災の話になってしまったが、林達夫の結婚前後のころの鵠沼での動静を伝えていて興味深い。なお、手紙のオリジナルは旧かな使いだが、本文では新かな使いに改めた。(おかだ てつあき)

出典：林達夫著作集 別巻 1 書簡 1987 年 4 月刊 平凡社

行く河の流れ 高瀬笑子著 2002 年 10 月刊 武蔵野書房

鵠沼 89 号、101 号 鵠沼を語る会

お菊むし ジャコウアゲハ

竹内 広弥(会員)

「あれ、ジャコウの雌だ。めずらしいな」

5月初め我が家の庭に薄茶色のアゲハチョウが飛来。鉢から伸びたウマノスズクサの周りをゆっくり、ゆっくり。産卵に来ているのだ。葉の裏に小さな卵を十数個産みつけていった。

鵜沼の住宅地ではアゲハチョウ、クロアゲハ、アオスジアゲハはよく見かけるが同じアゲハチョウの仲間のジャコウアゲハはあまり見かけない。アオスジアゲハはクスノキ、ほかの2種類はミカンなどの柑橘類が食草。ジャコウアゲハの食草はウマノスズクサという弦状の毒性植物。鵜沼には庭に柑橘類を植えているところは珍しくないが、ウマノスズクサが自生しているところは多くはない。何日かすると孵化し小さな茶褐色の幼虫がせっせと葉を食べている。その後、幼虫は何回か脱皮しその奇妙な形がどんどん大きくなってゆく。

会員の渡部邸の野趣に溢れた庭にはウマノスズクサが自生しており毎年、ジャコウアゲハが飛来するとのこと。数年前に何本かうマノスズクサを頂き鉢植えにしていたところ繁殖力はすさまじく、鉢からはみ出た根から何本も弦が伸びている。

雨降りが続いたので一番大きく育った幼虫を飼育ネットに取り入れ朝夕、観察する。何日かすると前蛹となり金色の蛹になった。そこで残りの終齢と思われる幼虫を数頭、ネットに移した。終齢幼虫の食欲は旺盛で一晩でウマノスズクサの葉は食い尽くされ茎をかじっている。夜中に糞をする音が聞こえる。そして朝、飼育ネットを覗くと最初の蛹が見当たらない。よく見ると後から取り入れた幼虫に食べられてしまったことが判明。迂闊だった。このジャコウアゲハはエサが不足すると共食いするのだ。

ジャコウアゲハは毒性のウマノスズクサを食し、鳥などの外敵から餌食にならないようにしている。実はこの物質がある食草を食べる目安にすると同時に未だ小さな幼虫とか動かなくなった蛹を食べる事につながるとのことである。

十分に食草を与えたため、それ以上の共食いは避けられた。幼虫は順調に育ち次々と金色の蛹となり、やがて羽化しいくつものチョウになり飛び立った。

(たけうち ひろや)



羽化したジャコウアゲハ ♀



終齢幼虫

余談 「お菊むし」

このジャコウアゲハの蛹を「お菊むし」と呼んでいます。

皿屋敷の話はいくつかあるが、その一つ「播州皿屋敷」で有名な「お菊さん」にちなんでのことです。この話、「むかし姫路の城で働いていたお菊さんが、殿様が大事にしていた皿を割ってしまいました。怒った殿様はお菊さんを縛り上げ井戸に投げ込んで殺してしまいます。その日から、一枚、二枚、三枚……と皿を数えるお菊さんの声が井戸から聞こえ、亡霊がでる」 その亡霊が、毎年、むしになって出る。それがジャコウアゲハの蛹「お菊むし」と言われています。姫路市ではジャコウアゲハを市の蝶として定めているとのこと。



金色に輝く奇妙な形の蛹 お菊さんが後ろ手を縛られた様子に似ている(右絵=net より)

国分別邸

岡田 哲明（会員）

会誌『鵠沼』では以前「鵠沼の歴史的家屋を訪ねて」というシリーズを設け、いくつかの歴史的建物を紹介してきた。その中には掲載後に消失したものや、取り上げた時すでに滅失していて資料だけを紹介したものもある。また、現存するものでは大斎藤の長屋門や登録有形文化財の後藤分院および林達夫邸、尾日向邸がある。

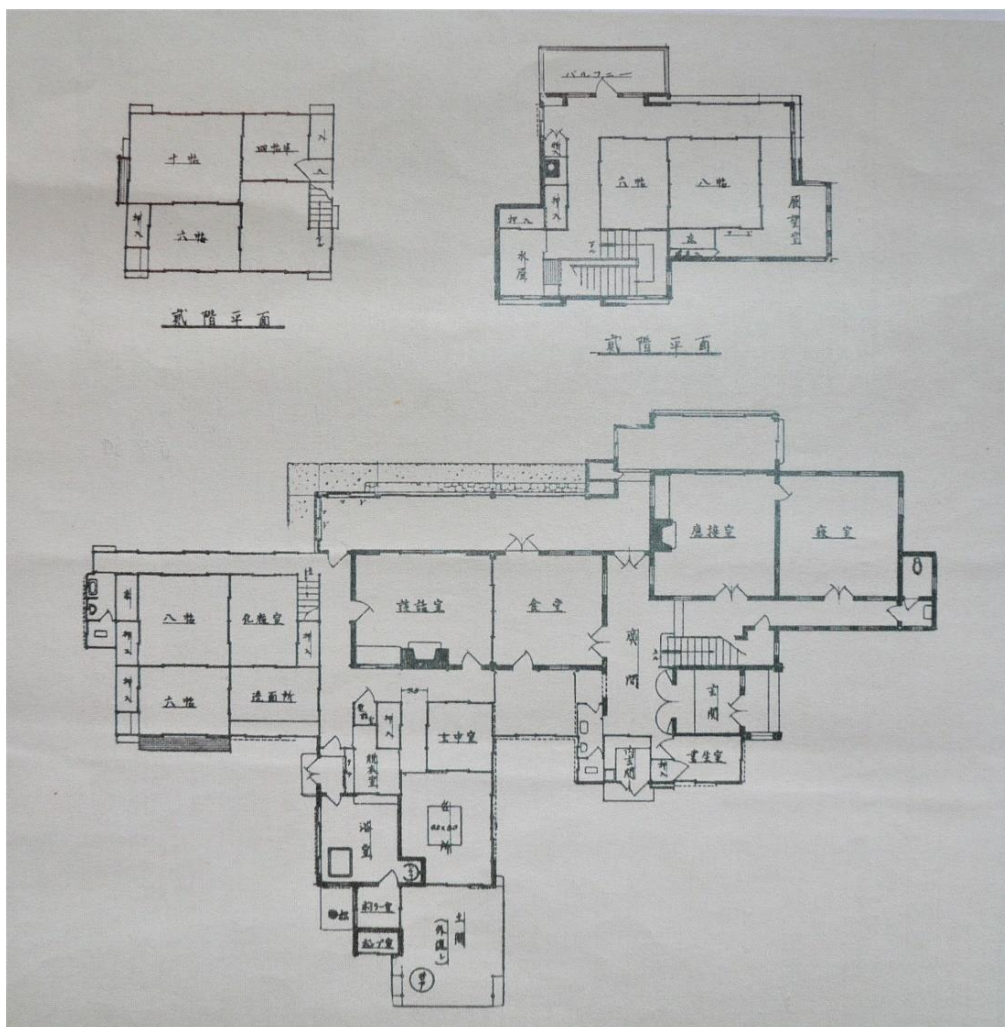
今回、取り上げるのは藤沢市鵠沼海岸 2-12-24 に現存する国分別邸で、国分家の夏の別荘として建てられ築 90 年余になる。当会では十数年前に見学をさせて頂いたが、諸般の事情で、今まで記事にされてこなかったのである。

国分別邸は「神奈川県文化財調査報告書 第 44 集 神奈川県の現存近代洋風建造物目録」にも収録されている鵠沼の洋風別荘建築の代表的な一つである。

小田急江ノ島線鵠沼海岸駅プラットホームの江ノ島寄り踏切の通りを海のほうへ向かって 200m ほど行くと左側に、周囲を高い松林に囲まれ、広い芝生に面した瀟洒な 2 階建ての国分別邸が見えてくる。



竣工当時の全景（昭和 9 年ころ撮影か）



1 階・2 階 平面図（上が海側・右が道路側）



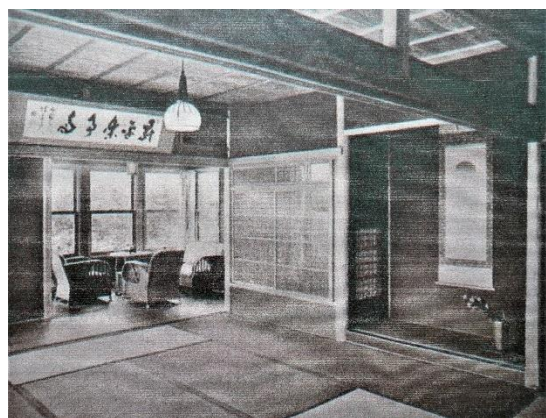
竣工当時の玄関

ここに掲載した竣工当時の写真と図面は「住宅建築図集」合資会社清水組によって刊行された自社施工物件の作品集に掲載されているものである。



K氏別邸

位置 湘南
坪数 延坪約 150 坪
竣工 昭和 6 年 6 月
設計 清水組
構造 木造 2 階建
様式 洋風
屋根 天然スレート葺
外部 色モルタル
粗面仕上げ
内部 主室壁紙貼
漆喰壁塗



上：竣工当時 1 階 洋室（談話室）

下：竣工当時 2 階 和室

この資料では「K氏別邸」「位置湘南」と書かれている。施主名をイニシャルにし建設地を漠然としているのは、施主側で明確な表現を嫌ったのであろう。

国分別邸は合資会社清水組（現在の清水建設株式会社）の設計施工物件である。竣工は昭和 6（1931）年になっているが 1 階平面の左のウイング（田の字型の 4 室）と、その 2 階は、2 年後の昭和 8 年の増築であるから、この写真は増築後の昭和 9 年ころの撮影である。

建設地の敷地面積は 2,173 坪である。この場所は、鵜沼海岸別荘地開発当初、蜂須賀茂韶侯爵の所有であった。ついで左右田喜一郎（1881~1927）が所有するところとなった。左右田喜一郎は明治 28（1885）年創業の左右田銀行の創業者左右田金作の長男で大正 2（1913）年、父の後を継いだ左右田銀行は昭和 2（1927）年 3 月の昭和金融恐慌で破綻し、横浜興業銀行に吸収された。

鵜沼の土地はその清算のため手放したものであろう。喜一郎はその心労からかその年の8月に46歳の若さで逝去している。

* * *

戦後すぐ、鵜沼の主要な洋風別荘は殆どGHQの接収にあったが、国分別邸もその例外ではなかった。砂浜や芝生でゴルフの練習でもしたのか、返却されたとき、寄木細工のフローリングにはゴルフシューズのスパイクの跡が痛々しく残っていたという。



平成7年に大規模修繕が行なわれ屋根は天然スレートから赤い西洋瓦に葺き替えられた



玄関アプローチ



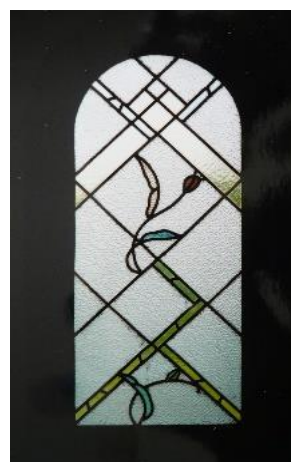
東側外観



上段：左 談話室・暖炉 右 テラス

中段：食堂

下段：ステンドグラス



国分貫一（1907~1991）は K&K の商標でおなじみの缶詰の国分商店（現：国分グループ本社株式会社）のオーナーで第 10 代国分勘兵衛（山本秀次郎 1883~1975）の長男、第 11 代国分勘兵衛を襲名している。

国分商店は正徳 2（1712）年、伊勢松坂の人、第 4 代国分勘兵衛が土浦に醤油醸造工場を設け



浮世絵に描かれた大国屋

日本橋本町に店舗を構え亀甲に大の字、大国屋の屋号で開業したのを創始とする 300 年以上の歴史を持つ老舗である。歴代トップは国分勘兵衛を襲名、現在 CEO の第 12 代は国分貫一の長男、国分章一（1939~）である。

冒頭に紹介した県の資料には国分貫一郎となっているが、この別邸が竣工した昭和 6 年は貫一 24 歳であるから実際の発注者は父親の第 10 代国分勘兵衛の山本秀次郎ではなかったかと推測されるのである。

国分別邸は現在、国分グループの法人所有、敷地内に寮を建てて、従業員の研修施設になっている。

また、鶴沼松が岡 3-23-12 の井上篤邸も株式会社巴川製紙所の法人所有となって現存している。井上篤は巴川製紙所の創業者井上源三郎の子孫である。また現在の社長井上善雄は篤の孫にあたる。

このように、個人所有から法人所有に切り替えた別荘建築は開発の波に吞まれないで歴史的に貴重な近代建築をその緑豊かな環境と共に保存され、一方、個人所有の別荘は世代交代で相続が発生すると建物は滅失し、敷地は細分化される。日本の税制のあり方が環境破壊に繋がっているのではないか。一考を要する。

（おかだ てつあき）

参考文献

「神奈川県文化財調査報告書 第 44 集」 1984.3 神奈川県教育委員会編
「住宅建築図集」皇紀 2595 昭和 10（1935）年 合資会社 清水組

鵠沼雑記（六）

古志 秋彦

鵠沼の松林で産声をあげた哲学雑誌『思潮』はわずか二年足らずで休刊になったが、そのあとを受け継ぐように大正十年十月、和辻哲郎を編集責任者とする『思想』が同じ岩波書店から発行された。こんどは岩波茂雄も自ら編集に加わった。

『思潮』で好評だったケーベル博士のエッセイもまた毎号『思想』の紙面を飾った。岩波茂雄は「ケーベル先生の文章を掲載するだけでも『思想』を発行する意義がある」といつていた。ケーベルは関東大震災の直前帰国の途につき、横浜のロシア領事館で船便を待つ間に病死した。『思想』は大正十二年八月号で「ケーベル先生追悼号」を出した。

『思想』は昭和三年九月号まで七年間に八十二冊を送り出したが、返品が多くなり、同号で休刊に追い込まれた。しかし編集メンバーに和辻のほか、新しく谷川徹三、林達夫を迎え、半年後の昭和四年四月、第二次『思想』が復刊した。林達夫の執筆になると思われる「『思想』再刊の辞」には次のような期待が述べられている。

「如何にそれが現代の特徴であるからとは言へ、かの猥雑と卑賤とをわれわれは斥ける。また、かの一党一派に固着し、他の立場を無視し排擠するの偏狭と固陋とを厳に警める。いやしくも心理の究明を目差すものなる限りわれわれはあらゆる立場を容れ、その生き生きとした対立と共同のうちに、常により普遍的なるものへの到達を志すであらう。普遍人間性に対する信頼からわれわれはこのことを期待する」

林達夫が高瀬三郎の五女の芳と結婚したのは、大正十一年五月であった。翌十二年の関東大震災で住んでいた鵠沼の貸別荘は倒壊、夫妻は芳の実家の高瀬邸に身を寄せた。そして昭和になってから近くに古い農家を移築して英国風の家を建てた。林はこの家と鵠沼を愛し、昭和五十九年に亡くなるまで、四十六年間この家に住みつづけた。この家を訪れたことのある芥川比呂志は、その印象を次のように書いている。少し長くなるが、林達夫その人とその家の雰囲気がよく捉えられているので、そのまま引用しよう。

「天井が高く、広い空間を領した沈静な趣きのある林さんの書斎に入ると、急に、話すことがなくなってしまうような不安に捉えられるのが常で、用意して

きたはずの話題が、ほとんどみな、ここでは場違いのように思われ出すのが不思議でした。黒い光沢を帯びた床や、きちんと本の並んだあまり大きくない書架や、清潔な白布に蔽われた休息用のベンチレットや、そういうものの中に座っていると、なんだか自分がひどく痩せた、頼りない存在に思われてくるのです。ここは本質的な、もっとも本質的な事柄についてのみ語る場所だという気がしてきて、二言三言しゃべると、もう何もしゃべることがなくなってしまう。

眼のやり場に困って、庭の灌木の茂みを眺めていると、林さんは相変らず微笑を浮かべながら、いつもの澄んだ声で

『手入れをしないものですからね、茂り放題です。前に、シェイクスピア・ガーデンを造ってみようかと思ったことがあるんだけど、どうもね』

『はあ、ヒースとか、勿忘草とか、柳とか、薔薇とか…』

思い出すままに、曲もなくシェイクスピア劇中の植物の名を並べたてるのが精いっぱいという有様ですから、折角の助け舟も役に立たず、うなずきながら微笑していらっしゃった、あれはじつは苦笑していらっしゃったに違いありません。かくてはならじと勇を鼓して、ルイ・ジュヴェの演技について一席論じると、林さんはにっこりしながら立ちあがって、机の上から原書を一冊取りあげて戻っていらっしゃる。

『ぼくも今、読んでいますよ、これ』

ルイ・ジュヴェ著『役者の考察』です。うなだれたくなる気分でしたね。あの時は」
(『林達夫著作集』付録月報 一九七一年)

＊

第二次『思想』を通じて林達夫と親交を結んだ野呂栄太郎は、まだ慶應大学理財科（いまの経済学部）の学生だった大正九年十二月、はじめて鵜沼に来了。後年、野呂を親身になって世話した島田いし助産婦の娘愛子は「冬を暖かいところで過ごしたいと、保養がてら勉強に来了のが親しくなるきっかけでした。当時私は六才でした」と『鵜沼時代の野呂栄太郎』（同書刊行委員会 昭和六十年）のなかで回想している。この本は野呂の没後三十年の記念の集いの後、関係者の手記などを中心としてまとめられた小冊子で、以後数回の追慕の催しの記録なども加え、没後五十年の記念に約百五十ページに増補、復刻されたものである。以下の記述はこの本によるところが大きい。

大正十四年、第五十回帝国議会で「治安維持法」が制定され、翌年四月「京都学連事件」で最初の適用、弾圧がなされた。野呂は指導的な学生三十八人ととも

に連座して検挙されたが、八月に病気で釈放され、十五年秋から翌年春にかけて七里ガ浜の結核サナトリウム鈴木療養所の隣の下宿太田屋で静養した。

「色々な点で困ることが多いから是非来てくれという手紙が来ましたので、母と二人で迎えに行き、隣の一人で隠居をしている森のおじいさんの処に紹介してあげました。食事の世話は私の家でしました。私の十四歳の時のことです」と愛子書いている。このあと野呂は鵜沼の森新五郎と島田いし宅で、昭和二年春から八年春までの六年間、不自由な身で結核と戦いながら超人的ともいえる執筆活動をつづける。野呂は幼いころ結核性の関節炎で右膝から下を切断、義足だった。

林達夫は『思想』の思い出」と題して次のように書いている。

「再刊号以来、しばしば『思想』に名をあらわす珍しい執筆者の一人に野呂栄太郎がある。この人については、わたくしには忘れられぬ思い出がある。当時、この慶應大学を出て間もない無名のマルクス主義者の才能を高く買ってその身辺のことまで気をつかっていたのは、立場の違うその教師の一人小泉信三氏であった。氏が岩波茂雄に野呂のことを依頼されたのがきっかけになって『思想』との交渉が、ひいてはわたくしとの交渉も始まったのである。彼が肺患のため療養していた場所が偶然、わたくしの住む鵜沼であったことも、必要以上に彼我を行き来させる基因になったが、しかし編集者と執筆者との交渉から個人的交わりを結ぶということのたえてなかったわたくしが自ら進んで異例の付き合いをしたというのは、やはり彼の人柄に大きな魅力があったからにちがいない。わたくしは彼にそれまで見たことのない清潔な思想の使徒を見出したのである」

七里ガ浜で野呂は「いつも机に向かっていた」といわれるが、鵜沼でも絶えず原稿を書いていた。同時に不自由な体をおして党活動にも熱心に取り組んでいた。治安維持法が制定されたこともあって、その活動は合法、非合法すれすれのところを巧みに潜り抜けていた。そして昭和三年三月の一斉検挙（三・一五事件）は逃れたものの、翌四年四月の一斉検挙（四・一六事件）で豊多摩刑務所に収監され、苛酷な拷問をうけた。

一か月後に釈放されたが、小田急線で鵜沼海岸駅に着いたときには、衰弱が甚だしく、駅のそとの砂の上で休ませ、戸板に乗せて島田宅まで運ばなければならなかった。「（小田急の）車の中でも血を咯くので、人に気付かれないように、綿で血を取り、たもとにどんどん入れていました」と迎えにいった愛子書いている。

る。そして「絶対安静の状態を二ヶ月ばかり続けて、寝たきりでいたため、高熱と汗で、寝ていた処の畳が、二枚ぬけてしまった」という。一命をとりとめたのは、島田母娘の献身的な看護のおかげであった。

これより前、昭和四年四月に『思想』が再刊されたことは既述したが、この再刊号に野呂は「猪俣津南雄氏著『現代日本ブルジョワジーの政治的地位』を評す」という論駁を載せた。そしてそれ以来、科学的マルクス主義の立場からの鋭利な論考が次々に『思想』を飾った。これらの著述と他の雑誌に書いた論文をもとに、野呂生前の唯一の著書となった『日本資本主義発達史』が鉄塔書院から出版されたのは昭和五年二月であった。この名著によって野呂の名は不朽のものになる。この本は戦後になって岩波文庫に入った。

＊

鉄塔書院は岩波書店にいた小林勇が独立して始めた出版社だった。小林は手始めに、注目していた『思想』の野呂の論考をまとめて出版したいと考え、旧知の林達夫を鶴沼に尋ね、野呂を紹介して欲しいと話した。林は「それなら自分よりも小泉信三のほうがいい」といい、それに従って東京に戻り、小泉の紹介状をもって、その日のうちに再び鶴沼に野呂を訪ねた。小林は次のように書いている。

「野呂は布団の上に半身を起して私を迎えてくれた。小泉の手紙を丁寧に開いて、真剣なまなざしで読んだ。私は野呂に今まで書いたものを集めて出版さしてほしいと話した。野呂は、はじめまだ本にする意志がないといったが、暫く話しているうちに、少しずつ動いて来ることが分かった。私はいろいろの話をして、二時間くらい野呂の枕頭にいた。そして結局本は私のところから出版しようということになった。野呂は貧しい部屋に伏していた。が清潔で、凛々しい感じであった。少しもたかぶるところがなく、また冷たい感じもしなかった」

林と同じ「清潔な思想の使徒」を小林もまた見ていた。この著作がひとつの契機となって野呂を中心に平野義太郎、山田盛太郎、大塚金之助らによる「日本資本主義発達史講座」（全七巻）の企画が岩波書店で始められることになる。『岩波書店五十年』によると昭和七年五月刊行が開始されたが、治安維持法による言論弾圧下の困難な出版だったという。『同書』は次のようにいう。

「この講座の中心は野呂栄太郎氏であった。編集者を中心に執筆者が約半年にわたって討論した後、執筆にかかったことは、この講座ではじめて行われた異例のことであった。はじめの3巻までは検閲を無事通過したがそれ以後はほとんど全部発売禁止処分にあい、その改訂版が漸く読者の手にわたるといふ、は

げしい干渉を受けた出版であった」

この講座の趣意書は野呂が書いた。「急迫せる情勢に転倒せる帝国主義者の脳裏には、恐らく戦争とファシズム以外の考えは浮かび得ないであろう」と時局を的確に指摘し「本講座は、今日世に問いうるかぎりにおいて、日本資本主義のもっとも包括的な科学研究であり、その本質的矛盾のもっとも根本的分析である」と述べている。しかし、この講座に野呂が執筆することはついになかった。

昭和七年十月の共産党員一斉検挙のあと、中央委員として地下にもぐって党再建にのりだした野呂は、翌八年十一月二十八日に逮捕され、言問署、上野署、品川署とたらい回しの拷問をうけ、昭和九年二月十八日北品川病院に移されて、翌十九日に絶命したからである。三十三歳であった。

＊

今年六月に鵜沼公民館で「鵜沼時代の野呂栄太郎さん」と題した没後七十周年を記念する集いが開かれた。この集会には野呂とともに共産党中央委員会の再建に尽くし、戦後はベトナム反戦の旗を高く掲げた故逸見重雄氏の未亡人で、今年百歳を迎えられた逸見千鶴子さんをはじめ、八十人を超える参加者があった。千鶴子さんの実家は島田いし宅の向かいで、重雄氏との結婚は野呂が仲人をしたという。千鶴子さんは「当時の野呂さんは非常に貧しかったが、そんなことはあまり気にせず、とても几帳面で新聞を隅から隅までよく読んでいた。また料理も得意で、大根はこんなふうに煮るのだといい『野呂おくさん』とあだ名がついた」などと当時を懐かしく回顧された。

没後三十年、四十年、五十年と節目ごとに開かれてきた記念集会が今年七十年目にまた鵜沼で開かれたことは、野呂がいまも多くの鵜沼人から愛されていることの証として記録しておきたい。

編集注：古志秋彦（こし あきひこ）は故会長伊藤聖さんの詩人としてのペンネーム。本稿は詩誌第3次『同時代』第17号（2004年12月号）に掲載されたものを転載。文中に出てくる林達夫邸（鵜沼桜が岡2・26）について『鵜沼』101号に関連記事がある。また、同建築は平成26（2014）年10月7日付で国の登録有形文化財（非公開）として登録されている。

野呂栄太郎は、正しくは榮太郎だが原文のままとした。



山の音と鎌倉文士（第 0015 話）

渡部 瞭

鶴沼は全国的に見ても豊かな文化的環境に恵まれた土地柄だと思うが、お隣に鎌倉という別格官幣大社(古いねェ)が控えているために大幅に損をしている。

何しろテキは、わずか 140 年ばかりとはいえ、日本の政治的中心だった(よく「古都鎌倉」というが、天皇の在所があったわけではないので、「宮処=みやこ」ではなく、「古都」というには難点がある)し、「鎌倉時代」という時代の名前になっているので、義務教育段階からイヤでも覚えさせられる。すなわち、日本人なら誰でも知っている地名なのである。とても藤沢の太刀打ちできるところではない。ましてや難読地名=鶴沼においてをやというわけだ。

で、この差はどこから来るのかということを、今回は地理的環境から考察してみよう。

茅ヶ崎市の県立鶴嶺高校に勤めていた時、授業でこんな冗談を言ったことがある。

鶴嶺高校の校名の由来は、学校が旧鶴嶺村に所在することにあるのだが、その鶴嶺村の由来は、鶴嶺八幡宮の存在にある。鶴嶺八幡宮は、1030(長元3)年9月、源頼義が下総の乱を鎮定するため懷島郷(現茅ヶ崎市)に至り、源家の守護神石清水八幡宮を勧請して鶴嶺八幡宮として祀り戦勝祈願をしたことによる。

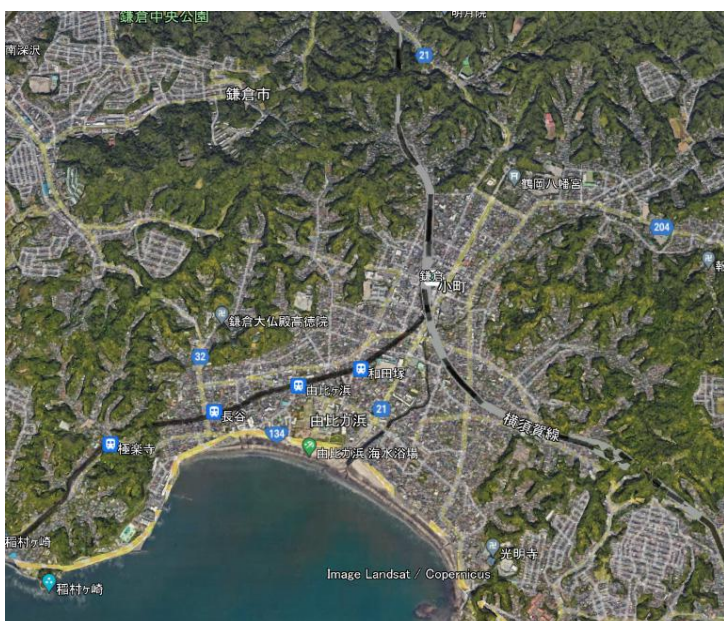
1051(永承6)年、「前九年の役(安倍一族の反乱)」が起り、陸奥守となった頼義の応援に向かった長子、源義家(石清水八幡宮で元服したことから八幡太郎と称する)が懷島郷に入り、鶴嶺八幡宮で戦勝祈願をした。前九年の役が終わった1063(康平6)年、頼義は鎌倉由比郷に鶴岡八幡宮の前身である「元八幡」を建立し、鶴嶺八幡宮はその旧社であることから「本社八幡宮」といわれるようになった。すなわち、鶴嶺八幡宮と鶴岡八幡宮は、共に源頼義によって祀ら

れた兄弟社であり、鶴嶺は鶴岡の兄貴分だということになる。

八幡太郎義家の曾孫に当たる源 義朝は鎌倉・亀ヶ谷に館を構え、大庭御厨鶴沼郷を襲い、その子頼朝は征夷大將軍として鎌倉に幕府を開く。かくして源氏が東国に進出する第一歩として祀った最初の氏神社が鶴嶺八幡宮というわけである。

頼朝が幕府を開くにあたり、祖先が祀った茅ヶ崎の鶴嶺八幡宮と鎌倉の鶴岡八幡宮のどちらを選んだかということ、防衛拠点としての地形上の理由から一も二もなく鎌倉を選んだ。頼朝に武家としての地理的センスがなかったなら、最初の氏神社のある茅ヶ崎を選んだかも知れない。もしそうならば、日本の歴史に鎌倉時代でなく、茅ヶ崎時代があったことになるというわけだ。

わずか標高 160m 弱だが、陰阻な丘陵に三方を囲まれ、海からの入口は万葉集にも詠われた崩れやすい海蝕崖に阻まれる鎌倉の地形は、まさに難攻不落の地



である。西に相模川があるとはいえ、無防備に展開する湘南砂丘地帯とは明らかに違う。

鎌倉の居住空間としての魅力は、丘陵の浸食谷「谷戸」にある。谷戸毎に御家人の館が構えられて防備にあたり、鎌倉五山などの寺院が開かれた。鎌倉への出

上空から鎌倉の地形を見る (Google Earth)

入口は「七口」といわ

れる 7 つの切り通しに限られる。鉄道の時代になってからも、トンネルを潜らなければ鎌倉に出入りできない。

この隔絶性が現代に至っても居住空間としての魅力を生み出している。あたかも背もたれの高い安楽椅子のような座り心地の良さがあり、これに比べると湘南砂丘地帯はベンチのようなものだ。

北側の丘陵は冬の季節風を遮り、温暖な気候をもたらす。12 月いっぱい紅葉

が見られ、年を越すと間もなくスイセンやウメが香る。四方を山で囲まれた盆地の奈良や京都と違い、南に海が広がる鎌倉は、夏の海風が涼しさを運ぶ。

鎌倉の魅力には面積的なコンパクトさがある。歩き回って苦にならない範囲に史跡や社寺がまとまる上、ハイキングコースや海水浴場まである。かくして鎌倉駅のホームには草履、ハイヒールからトレッキングシューズ、ビーチサンダルが混在することになる。これらは多くの観光客を呼び寄せるだけでなく、市内に住む人々に変化に富んだ散歩先を選ばせる。鎌倉は実に散歩向きの都市なのだ。社寺は四季折々の花を競う。鎌倉ほど社寺と花に関する書物が多種発行されている都市を他に知らない。

幕府滅亡後も関東管領が置かれて室町時代までは都市的要素が残ったが、上杉氏敗走後の鎌倉は急速に寂れ、低地には水田が広がる状態が続いた。江戸に幕府が置かれ、町人文化が発展すると、大山や江の島、金沢八景を結ぶ参詣観光ルートが人気を呼ぶようになり、人々の往来も増えたが、明治になっても段葛の両側は水田だった。

鎌倉再発展のきっかけは、横須賀線の開通によるところが大きい。東海道線が国府津まで引かれてすぐに、海軍鎮守府の置かれた横須賀への支線敷設が、複雑な地形をトンネルを削って突貫工事で進められた。横須賀線の開通によって魅力が生まれたのは、鎌倉よりさらにコンパクトな逗子である。海軍の高級将校が居を構え、一方で徳富蘆花や泉鏡花が名作を生み出す。

明治時代の鎌倉には泉鏡花、島崎藤村、夏目漱石、高山樗牛、国木田独歩らが住むが、いずれもごく短期間である。明治末から鎌倉に居を構え、生涯を過ごしたのは俳人の高濱虚子であり、大正に入ると有島生馬、木下利玄らがこれに続き、佐佐木信綱も別荘を構える。海軍教官時代の若き芥川龍之介や、広津和郎、葛西善蔵も数年間鎌倉に住んだ。しかし、「鎌倉文士」と呼べるような文化人の集住と交流が見られるようになるのは、関東大震災の復興期以来のことである。

震災後間もなく鎌倉に転居してきた文士に、久米正雄、里見弴、小牧近江、吉野秀雄(註)、松本たかし、林不忘、小林秀雄がおり、昭和に入ると大佛次郎、吉野秀雄、今日出海、北畠八穂、小島政二郎、深田久彌、高見順、さらに永井龍男、川端康成と続いた。彼らは1933(昭和8)年の「鎌倉アマチュア写友会」を皮切りに、「鎌ニュー会」、「汽車会」、「鎌倉同人会」などの交流活動をするると共に1934年には『海の謝肉祭』(第1回鎌倉カーニバル)を開催す

るなど、地域文化の興隆にも積極的に関わった。こうした戦前の鎌倉文士活動の集大成が1936(昭和11)年結成された「鎌倉ペンクラブ」だといわれる。

また、疎開や戦災からの避難で中山義秀、真杉静枝、荻原井泉水、蒲原有明、久保田万太郎、真船 豊、山口 瞳、村松梢風、村山知義らが鎌倉文士の仲間入りし、戦後民主主義の興隆の中で「鎌倉文庫」や「鎌倉アカデミア」といった市民文化への取り組みが行われた。

これに呼応するように、鵠沼でもその小型版のような活動が見られた。その双方に関わったのが鵠沼在住の林 達夫だった。

1950年代以降には立原正秋、小津安二郎、中村光夫、吉屋信子、永井路子、高橋和巳らが鎌倉に居を構える。

このように層の厚い鎌倉文士は、鵠沼文士と違いがあるのだろうか。

鵠沼で活動した文士は、別荘地を仕事場として選び、永住するつもりでなかった場合が多い。鎌倉文士の多くはある程度の成功を得てから、永住の予定で鎌倉に居を構え、実際に鎌倉で没し、鎌倉に墓所がある例が少ない。

鎌倉には永住したくなる魅力があるのだ。

その鵠沼との違いを考えてみよう。

自然環境から見ると谷戸の魅力である。クロマツを中心とする砂丘地帯は、乾燥して植物相が乏しいのに対し、照葉樹林に覆われた鎌倉の谷戸は、湿潤で緑濃く、豊かな植物相に恵まれている。また、生息する動物相も豊かである。ことに、鳥のさえずりや蝉の鳴き声などの音が彩りを添える。特にヒグラシやツクツクボウシは、鵠沼で聞く機会は少ない。針葉樹林と広葉樹林の違いからである。これらが谷戸という立体的な地形から、風音と共に背後に身近である。これらの魅力を、ノーベル賞作家川端康成は『山の音』という小説の題名に一言で表現したのはさすがといえよう。

社会環境から見ると、歴史の層の厚さが挙げられる。史跡や社寺が適当に配置され、先にも記したように多種類の散歩コースを選べるし、各種の展示施設や古書店、古美術店を巡るのも楽しい。居住する文化人の層も厚く、様々な交流によって刺激し合うこともできる。また、文化に対する行政の姿勢にも学ぶべきところが多い。

終わりに藤沢市と鎌倉市の名誉市民の一覧表を紹介しよう。

(わたなべ りょう)

名誉市民一覧 <編集注：2022 年現在>

<u>藤沢市</u>			<u>鎌倉市</u>		
片山 哲	元総理大臣	1969	川端 康成	作家	1969
降旗 徳弥	元松本市長	1969	小倉 遊亀	日本画家	1995
内山 岩太郎	元神奈川県知事	1970	横山 隆一	漫画家	1996
深沢 松美	元松本市長	1970	加瀬 俊一	外交評論家	1998
金子 小一郎	元藤沢市長	1972	永井 路子	作家	1998
和合 正治	元松本市長	1977	吉田 秀和	音楽評論家	2007
片岡 球子	日本画家	1990	蓮田 修吾郎	金属造型作家	2007
有賀 正	元松本市長	1993	平山 郁夫	日本画家	2007
加藤 東一	日本画家	1997			
田島 博	友禅作家	1999			
岡崎 洋	元神奈川県知事	2003			
葉山 峻	元藤沢市長	2004			
菅谷 昭	松本市長	2005			
山本 捷雄	元藤沢市長	2010			
船村 徹	作曲家	2017			
吉野 彰	企業研究者	2020			

[参考文献]

グループ・コア：『鎌倉で遊ぶ本』文潮出版(1979.1)

以東秀郎：『鎌倉名数ガイド』日本図書刊行会(1987.3)

[編集註]

吉野秀雄は慶応義塾大学在学中に肺結核となり大正 14 年 8 月、七里ヶ浜の鈴木療養所(現・鈴木病院)で転地療養をはじめた。光則寺(鎌倉市長谷)近くの借家にも居住したことなどがきっかけとなり、昭和 6 年鎌倉に転居し生涯の住まいとした。

<故渡部瞭会員『鵠沼を巡る千一話』第 0015 話より>

「鵠沼を語る会」活動の記録

(令和3年12月～令和4年11月)

令和3年

12月例会

12月14日(火) 10時～12時 第3談話室 14名出席

令和3年度の鵠沼公民館まつり中止に伴い、令和4年1月17日～3月28日にロビーにて32サークルが一週間交代でパネル展示。当会は最後の週に展示

12月運営委員会

12月21日(火) 10時～12時 第1談話室 5名出席

令和4年

1月例会・新年会

1月11日(火) 1月12日(火) 11時30分～13時30分 14名出席

新年会を兼ね、藤沢「さかな家」で開催。ビンゴはムリなのでアミダくじで賞品を当てた。幹事：田中会員 賞品購入：刀根/渡部/綿谷会員 会費¥3,000

1月運営委員会

1月25日(火) 10時～12時 第1談話室 9名出席

2月例会

2月8日(火) 10時～12時 新型コロナウイルス感染防止のため中止

2月運営委員会

2月22日(火) 10時～12時 第2談話室 8名出席

3月例会

3月8日(火)

昨年来延び延びになっていた「史跡めぐりー龍口寺」を実施 15名参加

3月運営委員会

3月29日(火) 10時～12時 第4談話室 6名出席

パネル展示 3月21日～28日 『楷の木を語る』をテーマに楷の木調査を発表

4月例会

4月12日(火) 10時～12時 第3談話室 16名出席

報告：新年会/史跡めぐり/パネル展示(楷の木を語る)

議題：今年度の活動について/会誌『鵠沼』122号について/鵠沼を語る会 30

周年記念樹「枝垂桜」について

お話：阿部昭『子どもの墓』 朗読 刀根恵子会員 鵜沼の情景が数多く登場する作品。情景を辿れる鵜沼の地図を配付

4月運営委員会

4月26日(火) 10時～12時 第1談話室 7名出席

第36回定期総会・5月例会

5月10日(火) 10時～10時30分 文化活動室 17名出席
総会後、5月例会の「お話」として鵜沼郷土資料展示室で開催中の『鵜沼南部の変遷―藤沢駅南口周辺の発展とその開発記録』を内藤会員の説明で見学

● 総会

総会議長：有田裕一会長（会則第9条2に則り） 司会進行：綿谷克延会員
資料：総会議案書、会則、会員名簿の3点を配付

《第一議案》 令和3年度事業報告

- 会誌『鵜沼』発行 第121号（令和3年12月1日発行）
- 公民館まつりの展示 新型コロナ感染防止のため開催中止
- 史跡めぐり 2022年3月8日(火) 「龍口寺」「常立寺」 15名参加
- 新年会 2022年1月11日(火) 14名参加。「さかな家」にて
- 楷の木プロジェクト 寄贈した楷の木の現状や周りの環境について調査
- パネル展示に参加 2022年3月21-28日。『楷の木を語る』がテーマ

《第二議案》 令和3年度収支決算報告

大川久会計担当より詳細に説明された
収入：63万8,179円 支出：10万1,865円 次年度繰越金：53万6,314円
会計監査報告 渡部かほり監査役より「正確かつ適正と認めます」との報告

《第三議案》 令和4年度事業計画(案)

- 公民館まつり出展：鵜沼地区公民館まつりの正式決定を待ってから対応
- 史跡めぐり：訪問地未定 年1、2回実施
- 会誌制作第122号：今年度も2回の発行は難しい。12月に122号を発行
- その他：活動を進めてゆくなかで事業計画として相応なものと考えられる
テーマが提案された場合、検討し追加。経費は予備費より支出

《第四議案》 令和4年度収支予算(案)

コロナ禍にあっても通常活動できるとの前提で予算を立てた

☆これらすべての議案は出席した全会員の拍手を以て承認された

5月運営委員会

5月31日(火) 10時～12時 第2談話室

4名出席

6月例会

6月14日(火) 10時～12時 学習室①

15名出席

議題：会誌『鵜沼』122号について/30周年記念樹「枝垂桜」の対処について/
公民館まつりは10月15日-16日に開催することが正式に決定

お話：原 雅子(会員)著『鵜沼』より 変わりゆく鵜沼海岸商店街への想い
が描かれている作品。刀根 恵子会員による朗読

6月運営委員会

6月28日(火) 10時～12時 第1談話室

3名出席

7月例会

7月12日(火) 10時～12時 学習室①

15名出席

議題：会誌122号掲載予定記事/史跡めぐり参加者に感想など一文を依頼/記念
樹「枝垂桜」の回復処置について。公民館まつりへの参加決定

7月運営委員会

7月26日(火) 10時～12時 第1談話室

4名出席

8月例会

8月9日(火) 10時～12時 第3談話室

12名出席

議題：会誌122号掲載記事の集まり状況・再依頼。

お話：フリートーク 創立150周年を迎えた鵜沼小学校の昭和20-30年代の
頃の話で盛り上がった

8月運営委員会

8月30日(火) 10時～12時 第1談話室

6名出席

9月例会

9月13日(火) 10時～12時 文化活動室

11名出席

議題：10月15-16日開催の鵜沼公民館まつりーパネル設置(12日) 撤去(17日)
に当会から大川・田中両会員2名が協力を申し出てくれた。展示作業は
10月13日10時より行う。会誌122号の進捗状況報告

お話：フリートーク 鵜沼小学校・鵜洋小学校・鵜沼中学校のむかしの様子、
引地川の堰のことなど写真を見ながらの話となった

9月運営委員会

9月27日(火) 10時～12時 第2談話室

7名出席

10月例会

10月4日(火) 10時～12時 学習室①

17名出席

議題：公民館まつりの展示作業（13日/16日）の協力者を募った/会誌122号の原稿はほぼ集まり製本作業は11/29(火)10時より第3談話室で行う。製本協力者の確認をした。新年会－2023年1月10日(火)「さかな家」で開催。11、12月例会で参加者を募る。幹事役は今回も田中会員

お話：むかしの鵜沼の写真と地図を用いての引地川周辺の話（有田会長）と鵜沼に滞在していた芥川龍之介を診察した元会員の富士山（たかし）医師の診察記録に基づく話（佐藤会員）がされ、好評だった

第46回鵜沼地区公民館まつり

10月15日(土)、16日(日) 文化活動室

「楷の木を語る」をテーマに寄贈した楷の木の現状調査をパネル4枚に展示した。刀根恵子会員の書によるテーマがパネル展示を引き締めた

10月運営委員会

10月25日(火) 10時～12時 第2談話室

6名出席

11月例会

11月8日(火) 10時～12時 学習室①

11名出席

公民館まつり報告/会誌122号最終制作スケジュール説明/新年会2023の案内並びに参加希望者を募った。12月例会で再度、募り会費を集める

お話：鵜沼郷土資料展示室で開催中の◆展示室開設20年・展示50回のあゆみ
◆特別展示「鵜沼小学校創立150年の道のり」を内藤会員の説明で見学

11月運営委員会・会誌122号製本/贈呈先発送作業

11月29日(火) 10時より第3談話室で122号の製本作業(10数名参加予定)

13時～15時 第1談話室 122号の贈呈先発送作業ほか

<会員>43名 2022年11月現在

入会：井伊 雅子（2022.5.10） 神谷 章夫（2022.5.14）

吉永 昭男（2022.7.12） 平井 由為子（2022.9.13）

物故：河野 顕子（2022.10.11）

編集後記

■新型コロナは中々沈静しません。会の活動も思うにまかせず従来年2回の会誌発行は、昨年に引き続き今年も年1回の発行となりました。

会誌は出来るだけ多くの会員が記事を書くのが理想です。今回、龍口寺見学では12名の方が書いて下さいました。（編集子）

■本当に待ち遠しかった会誌122号が仕上がる。嬉しい。新会員の並木さん、熊川さんの投稿があり、これがまた嬉しい。並木さんの「消え去った鵠沼弁」は格調高い取り上げ方で敬服した。私くらいの年配では、幼友達と会えば自然に今でも鵠沼弁が出る。鵠沼弁頑張れ！まだ消えてはいないのだ。（有田）

■コーヒブレイクでは子どもの頃のきれいな鵠沼海岸の様子を思い出して書きました。海岸は様変わりです。東洋のマイアミと呼ばれた頃に比べるとサーフショップが立ち並び、東洋のハワイといった感じです。でも東に江ノ島、西に富士山の風景はいつも美しいです。（大川）

■鵠沼のアカガエルを林達夫が好んで食べたという書簡を初めて読んだときは驚いた。地元育ちの方に訊いても食用ガエル（ウシガエル）は食べたがアカガエルは聞いたことがないといわれる。私が鵠沼に住み始めた50年ほど前は、ヒキガエル、アマガエル、トノサマガエルと、蛙は結構いたがアカガエルは見たこともなかった。アカガエルの生息環境が急速に失われたのでしょうか。

かつて「お別荘」と呼ばれた富裕層が広大な敷地に建てた別荘建築で現存しているのは松が岡1-6尾日向邸、同2-5井上政良邸、同3-23井上篤邸、鵠沼海岸2-12国分邸のわずか4邸しか残っていない。それらも当初から比べると敷地が縮小されている。建築物には寿命がありいずれ消滅するとなれば、記録を残すことは意味のある事だと思う。（岡田）

■江の島ヨットクラブ、東京オリンピックセーリング競技をテーマに書きました。皆さまのご批評を仰ぎ、次回、執筆の種を見付けたいと思っております。歴史ある本誌に掲載の機会を頂き有難うございました。（熊川）

■今年は山梨や長野のチョウ探索ポイントでは、いつになくチョウの姿は少なかった。一方、鵠沼付近ではアゲハチョウを中心に多くのチョウが舞っていた。普段はあまり見かけないジャコウアゲハが多く、拙宅の庭にも5月ごろから飛来し食草のウマノスズクサに産卵した。蛹に特徴があり「お菊むし」とも呼ばれるこのチョウをつぶさに観察、次々と産卵が繰り返され30数頭のジャコウアゲハが我が家で羽化し飛び立った。（弥）

『鵜沼』 第 122 号
令和 4 (2022) 年 12 月 1 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>